

第 8 章 教育学部附属山口小学校・幼稚園構内の 試掘調査

1 調査の経過

山口市白石3丁目1-1に所在する山口大学教育学部附属山口小学校・幼稚園（亀山キャンパス）の昭和58年度事業の一つとして運動場の整備が上げられた。これまでこの構内には遺跡は周知しておらず、その工事自体もグラウンド整地土の入れ替えで掘削深度も比較的浅いものであったが、地理的環境や周辺の遺跡分布状況から察してこの地にも遺跡が包蔵する可能性が高いと推測されるところであり、また今日に至るまでの間、埋蔵文化財の調査が全く行なわれていないことから（第1章2「構内の調査について」参照）、59年3月の工事中に際して立会をする計画を立てた。しかし、3月初め調査予定直前に至って当初の工事内容以外に一部深さ1mにもおよぶ排水施設等の付随工事も本工事に先行してあることが明らかになり、かつその工事は着工済みとの連絡を受けた。資料館では急速関係者共々現地視察を行なった結果、付随工事は既に最終段階で一部完成しており、土層の観察等は全く不可能な状況であった。また工事掘削による排土中に包含層らしき土の混在が認めら

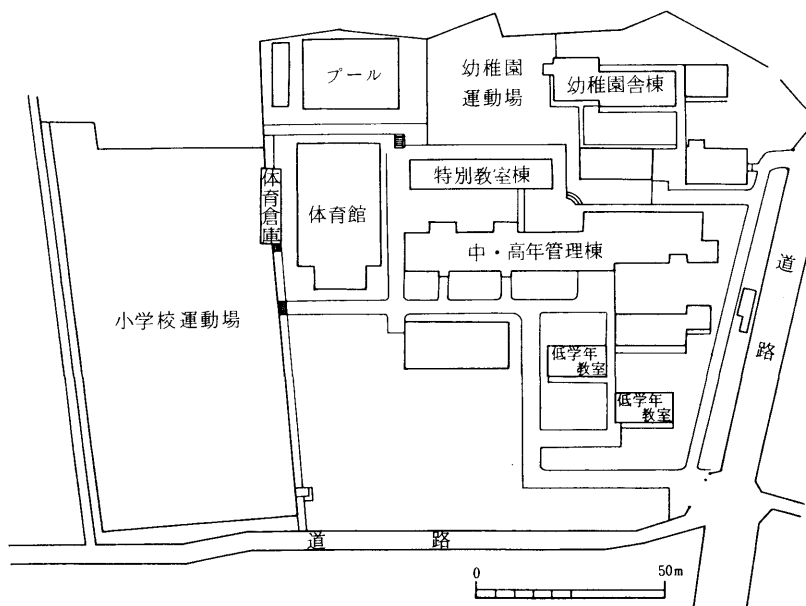


Fig.71 構内図

教育学部附属山口小学校・幼稚園構内の試掘調査

れたため、以後の本工事を含め、今後将来におけるこの地での工事に際しての埋蔵文化財の影響等の判断データ集積を目的とした最小限の試掘調査を本工事前に行なうことに改めた。調査は人文学部考古学研究室の協力のもと、昭和59年3月26日より1週間を予定して小学校運動場6地点、幼稚園1地点に総面積約60㎡のトレンチを設定し遺物包含層・遺構の有無確認を主目的とした調査を行なった。

調査に至っては、当初の予想以上に遺物包含層・遺構が検出されたため、3月29日に埋蔵文化財運営委員会並びに関係者等の説明会を現地にて開き、遺跡調査の公開と以後の調査方針等について検討した。その結果、工期の関係で4月第1週までに本工事に着手したいという工事関係者側の意向および本工事掘削を整地土層内に留めるとする工事内容などから考え、Aトレンチ付近以外の地点については工事開始に同意し、3月30日をもって調査を終了した。

(結果的には工事サイドの機械等の段どり都合で4月第2週以降となる。)ただし、Aトレンチ付近は県内において稀少な木器が出土するという学術的視点から1週間の調査延長が認められるに至り4月6日まで継続実施した。

なお、4月3日には鳥形木製品に関してその発見の意義を公表するために委員会および現地説明会を行なった。

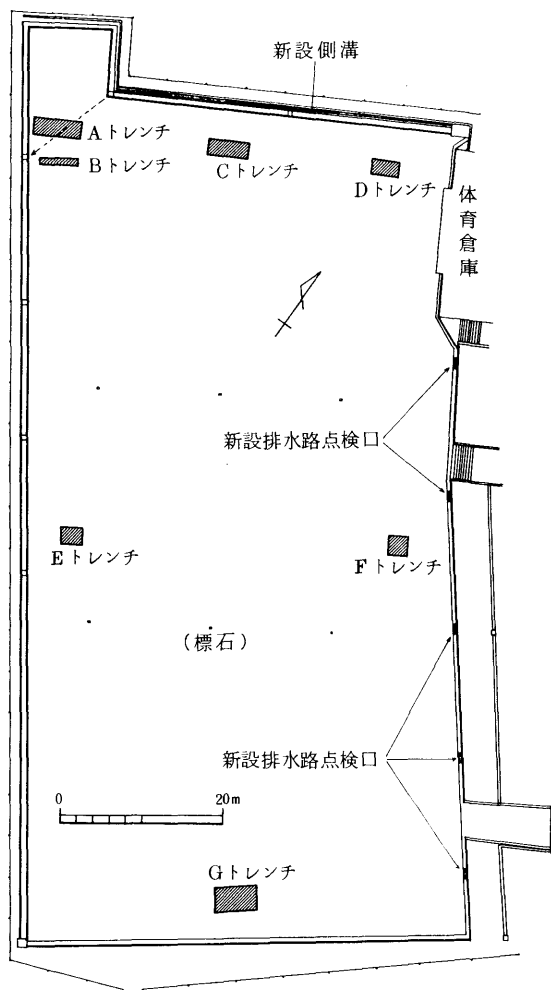


Fig.72 小学校運動場トレンチ設定図

2 位置と環境

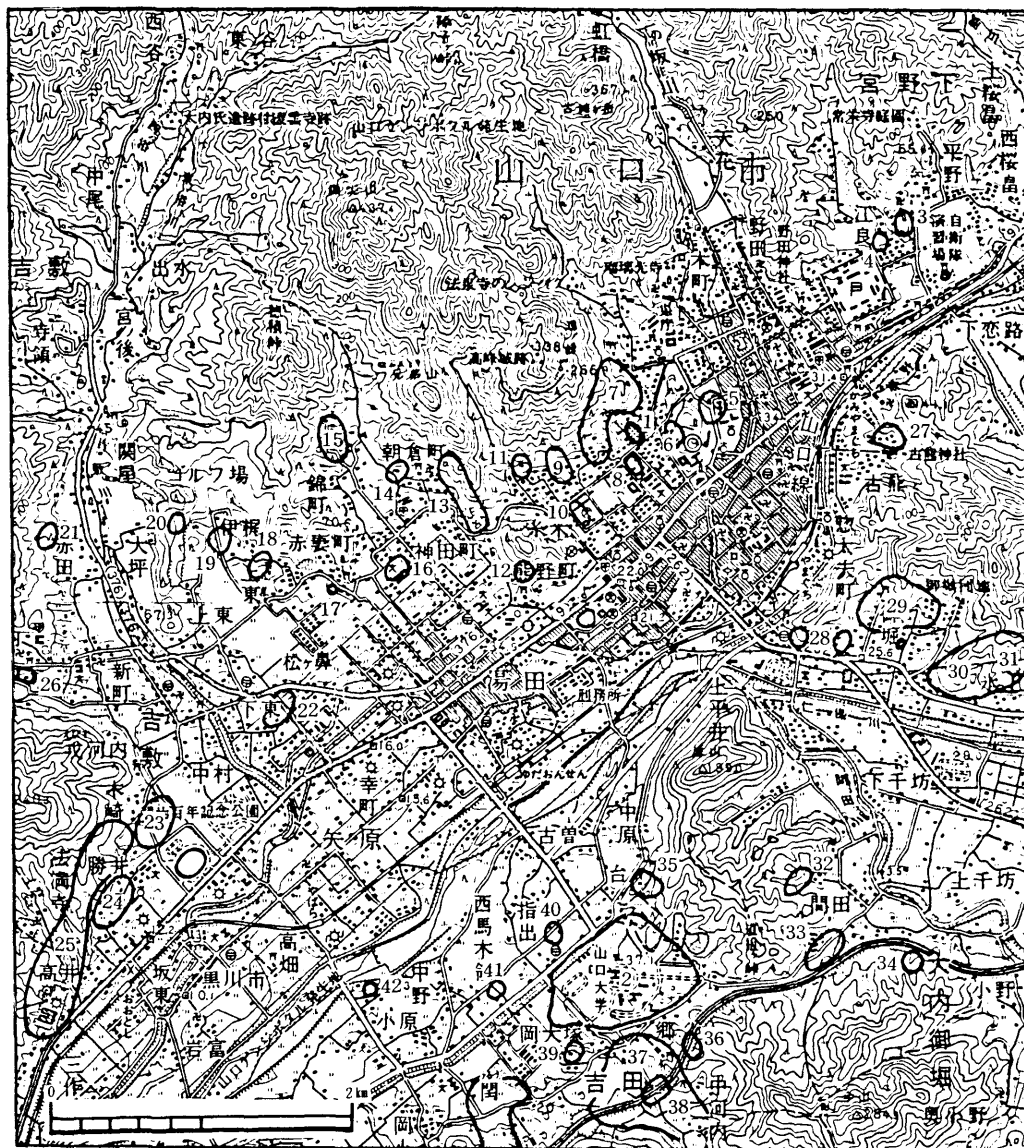
(1) 地理的環境

白石遺跡の所在する山口盆地は、津和野一岐波構造線と称する中国山地の隆起に伴う断層作用によって生じた盆地で、かつ周辺山から河流による土砂運搬によって盆地床に沖積底地が形成された埋積盆地である。盆地周辺は主として三郡変成岩から成る小起伏山地の400 m前後の山々に囲繞され、とくに北西側では700 m以上にもおよぶ中起伏山地に相当する東・西翻山などが控え聳えている。盆地床は北東から南西方向に漸次低下し、また周辺山麓縁辺部よりも盆地中央に向かって傾斜している。盆地床には主たる構造線に沿って榎野川が貫流しており、その川沿いは氾濫原をなして低湿地の微地形を呈する。また、周辺山地に小規模な断層線谷が多くあり、それに伴って一ノ坂川や朝倉川、吉敷川などの小河川が流下して扇状地を形成するなど山口盆地の地形をより複雑¹⁾にしている。白石遺跡は、山口盆地のほぼ中央の北西に聳える鴻ノ峰（標高338 m）の南麓裾部付近に位置し、すぐ東側に独立低丘陵の春日山・亀山があり、西側は鋤尖山から派生した兄弟山・向山（障子ヶ岳）を眺望できる。南側は緩傾斜面で下降し、そこには標高20～30 mの沖積低地が広がっている。河川は鴻ノ峰の東縁を流下してくる五十鈴川が白石遺跡の周囲、東から南にかけ走向し、西側では向山、東裾部に糸米川、南には錦川、榎野川が流れる。

(2) 山口盆地の歴史的概要

山口盆地の歴史は古く縄文時代まで遡り、榎野川流域では木崎遺跡、後河原遺跡、花の木遺跡²⁾などが当時の遺跡としてあげられるが、この時代の遺跡の数は少ない。しかし、弥生・古墳時代になると飛躍的に遺跡数は増加し、概して集落は山麓縁辺部の緩傾斜面上や微丘陵上に営むことが多く、平川の吉田遺跡³⁾のようにこの時代に大規模な集落を形成し、中世まで長期にわたって連綿する遺跡もみられる。また朝田遺跡⁴⁾や亀山遺跡⁵⁾など見張りの機能を具備した高地性集落も一時的に出現する。墓域は集落近傍の丘陵上や山麓に設定しており、弥生時代全般を通し古墳時代前期までは集団家族墓の様相の強い土壌墓・箱式石棺などの在地性の葬法を継承するが、中期以降漸次的に畿内の影響をうけ一部の地域で竪穴式石室をもつ高塚墳や前方後円墳が出現し、後期には横穴式石室を内部主体とする小円墳を盆地全域で採用している。古墳時代の墳墓形態の変遷はこの地における畿内勢力による在地豪族の掌握過程の一端を窺わせるが、後期には北部九州から導入されたと考えられる竪穴系横口式石室⁸⁾や横穴墓⁹⁾の築造もあり、山口盆地の地域的特色がみうけられる。

律令時代には、地方制度の一つとして国、郡（評）、里（郷）の行政区画が設定されて



- | | | | |
|-------------------------|-------------|-------------|------------|
| 1 白石遺跡
(山口大学附属山口小学校) | 10 山口高校構内遺跡 | 21 泉山古墳群 | 32 問田・山崎遺跡 |
| 2 吉田遺跡
(山口大学吉田キャンパス) | 11 木戸神社古墳群 | 22 下東遺跡 | 33 問田遺跡 |
| 3 竹の花遺跡 | 12 権現山古墳 | 23 木崎遺跡 | 34 新開古墳 |
| 4 江良遺跡 | 13 荻峠遺跡 | 24 太田遺跡 | 35 日吉神社古墳群 |
| 5 松柄遺跡 | 14 朝倉遺跡 | 25 朝田墳墓群 | 36 乗ノ尾石棺群 |
| 6 亀山遺跡 | 15 朝倉河内古墳群 | 26 天神山古墳群 | 37 神郷大塚遺跡 |
| 7 鴻ノ峰・白石古墳群 | 16 湯田楠木町遺跡 | 27 古熊遺跡 | 38 吉田岡島遺跡 |
| 8 茶臼山古墳群 | 17 赤妻古墳 | 28 橋村・御堀石棺群 | 39 大塚古墳 |
| 9 糸米古墳群 | 18 土師宮古墳群 | 29 御堀遺跡 | 40 郷遺跡 |
| | 19 伊梶堤遺跡 | 30 入野遺跡 | 41 馬木遺跡 |
| | 20 大判石棺 | 31 水上古墳 | 42 中島遺跡 |

Fig.73 周辺地形図および遺跡分布図

位置と環境

いるが、『倭名類聚抄』に記載の「吉敷郡」が山口市域を中心とした地域にあたとされまたその郡内に10の郷が置かれ、山口盆地の幾カ所に郷の推定地がある。とくに白石遺跡のある宇野令地域は「宇努郷」¹⁰⁾の郷域とされている。さらにこの時代には土地制度として全国各地に条里制を実施しているが、山口盆地内にも吉敷・湯田付近の小字名に坪名が残ることからこの地でも広く施行されていたことが想定されている。

土地所有制の変遷に関しては、8世紀以降漸次的に各地で土地の私有化が始まり荘園制が出現させるが、山口盆地内でも8世紀代に成立する東大寺領の荘園「樺野荘」が樺野川流域に推定されており、その面積は天曆四年(950年)の『東大寺封戸庄園并寺用張』によると九十一町六段十九歩にもなる。また鎌倉時代には朝倉庄(祇園社領)や恒富保、湯田保、南北朝・室町時代になると吉木保、宇野令などが盆地内の各地域に成立する。¹¹⁾

中世、とくに南北朝時代の天平15年(1360年)頃に大内弘世が居館を大内御堀から山口へ移して以降は、この地は大内氏の拠点地となり城下町として発展する。その大内氏は京洛を擬して山口の都市計画を進め、京から神社を勧請したり、多くの文人を招いたりなどして積極的に文化の導入を行なった結果、山口は一時京都をしのぐ繁栄となり「西の都」といわれるに至った。しかし天文20年(1551年)の陶晴賢の乱を契機に大内氏の栄華をとどめた山口の町はしだいに衰微し始める。

毛利氏支配下時代に至っても当初は、長門国一円と周防吉敷郡を分国にし、その中心地として山口を¹²⁾考えていたが、関ヶ原の戦い以後の毛利氏領国削減のため中止となり、さらに一旦防長二州の新城地の候補地にもなったが幕府に認められず、この時点より長い間¹³⁾城下町としてきた地位を失い、以後町は急速に衰退していき、江戸時代終り頃まで続くことになる。天文末年(1550年)頃には山口の戸数はほとんど二万に近かったとされているが、近世初め頃にはすでに戸数は半分以下に減少し、慶長検地(1610年)頃には山口・三田尻(防府)を合して僅か4600戸となっている。¹⁴⁾

しかし、幕末の文久3年(1863年)に藩庁が萩から山口へ移転したことによって再び繁栄を取りもどすことになる。明治4年(1871年)の廃藩置県で山口県の県庁所在地になり、それ以来、県の中核となって今日に至っている。

(3) 白石周辺の遺跡

鴻の峰の南麓および東西を亀山と向山(障子ヶ岳)¹⁵⁾に挟まれた地を中心に、その近傍周辺を含めた地域に存在する古代から中世にかけての遺跡を概観する。

旧石器時代に遡る遺跡は今日知られておらず、縄文時代の松柄遺跡¹⁶⁾がこの地域では最も

古い時代の遺跡に相当する。この遺跡は亀山東麓縁部に位置し、縄文時代晩期頃の土器包含層が確認されている。

弥生時代および古墳時代になると、山口盆地全体の様相と同じくこの地域でも遺跡が急増する。今回発見された白石遺跡もこの時期のものであるが、周知の遺物包含地としては¹⁷⁾亀山遺跡、¹⁸⁾山口高校構内遺跡、¹⁹⁾荻峠遺跡がある。まず亀山遺跡は白石遺跡の東方に位置する標高67 mの亀山および春日山の山頂、山麓部周辺に広がる弥生時代中期の遺跡で、竪穴群や規模の大きい溝状遺構が確認されている。山口高校構内遺跡は白石遺跡の南西約500 mにある県立山口高等学校敷地内西寄りの地点にあり、旧地形は糸米川が形成した扇状地の扇央部付近と思われ、低地性の遺跡である。大正年間の調査で、弥生土器、土師器、須恵器の遺物包含層の存在が認められている。荻峠遺跡は兄弟山と向山を画する峠の丘陵頂部から南西麓裾部に立地する遺跡で、弥生時代初め頃の貯蔵穴や古墳時代前期の土壌が検出されている。またこの他、鴻ノ峰南麓周辺でもこの時期の土器の散布等がみられる。しかしこれら周辺の遺跡では検出された遺構が少なく、遺跡の規模や性格、機能等を明確にするまでは至っていない。但し、この時代の墳墓は数多く確認されており、当時の墓域の立地条件や築造形態などを知り得ると共にこの時代になって多くの人々がこの地域を居住地として選定・進出し、共同体が形成されていったことが窺われる。この地域の墳墓は時期的に弥生時代終末から古墳時代初頭にかけてのものと同様に古墳時代後期のものが大半を占め、前者には茶臼山石棺群²⁰⁾、糸米遺跡²¹⁾、荻峠石棺群²²⁾がある。これらは、いずれも丘陵上にあり、主体部は主に箱式石棺を用いている他、糸米遺跡では台状墓を築き、土壌墓や壺棺墓も主体部として併用している。後者では鴻ノ峰南麓の標高50～80 mの間に鴻ノ峰古墳群²³⁾や白石古墳群²⁴⁾、糸米古墳群²⁵⁾、木戸神社古墳群²⁶⁾が連続し、また支丘の丘陵端部上に茶臼山古墳²⁷⁾、向山に権現山古墳²⁸⁾がある。これらの古墳は六世紀後半から六世紀末にかけてのものがほとんどで、横穴式石室を主体部とし、その多くは径10 m前後程度の小円墳である。この時期の古墳はこの地域に存在した上層階級の家族墓であったと思われ、とくに鴻ノ峰Ⅰ号墳では副葬品から6体以上の埋葬が推定されており、長期にわたってこの山麓が奥津城になっていたことを物語っている。

奈良時代・平安時代の遺跡は明らかではないが、中世に至ると大内氏との関係が多くなる。寺社としては鴻ノ峰山麓に鎮座する大内義興創建の山口大神宮²⁹⁾、大内弘直の菩提寺である普門寺³⁰⁾、向山には大内弘世関連の熊野神社（湯田讃井権現社）³¹⁾などが現存する。また古城として鴻ノ峰山頂には大内義長によって築城され、現在石垣や井戸などが残り国の史跡に

位置と環境

なっている高嶺³²⁾城跡や向山に障子ヶ嶽³³⁾城跡がある他、亀山には戦国時代末期に至って毛利によって築造されかけた長山城³⁴⁾跡がある。なお周知の遺跡には指定されていないが、この他江戸時代に作成された大内時代の復元図『山口古図』によると今は廃絶している寺社や大内氏家人の屋敷などの存在も多く認められる。さらにまた白石古墳群のある丘陵上ではこの時代の庶民の墓と推定されるものも近年の埋蔵文化財の発掘調査で明らかになってきている³⁵⁾。

〔注〕

- 1) 三浦肇 「自然」(『山口市史』、1982年)。
- 2) 山口県教育委員会 『山口県遺跡地図』(1972年)。
- 3) 山口大学埋蔵文化財資料館 『山口大学構内遺跡調査研究年報』(1982年)。
- 4) 山口県教育委員会 『朝田墳墓群VI』(1983年)。
- 5) 小野忠熙 『高地性集落跡の研究』資料編(1979年)。
- 6) 山口市教育委員会 『天神山古墳』(1979年)。
- 7) 注4)に同じ。
- 8) 朝田墳墓群の中にみられる。注4)に同じ。
- 9) 古敷(朝田墳墓群)や平川(日吉神社古墳)周辺に多い。
- 10) 三浦肇 「集落と都市形成」(上)上代(『山口市史』各説編、1971年)。
- 11) 河村乾二郎 「原始・古代」(『山口市史』、1982年)。
- 12) 三坂圭治 「毛利氏時代」(『山口市史』、1982年)。
- 13) 候補地として山口の高嶺(鴻峯)・防府の桑山・萩の指月山の三カ所が上げられ、結局、幕府の意向に従って指月山に決まる。
- 14) 注12)に同じ。
- 15) 白石の地名は現在この地域の東半を称しているが、本来附属小学校付近の小さな小字地名が後世拡大したものである。高橋文雄 『続・山口県地名考』(1979年)。
- 16) 浜田清吉 『山口市後河原の遺物発見地』(1953年)。
- 17) 弘津史文 『防長石器時代資料』1929 および前田耕次 「原始・古代」(『山口市史』、1982年)。
- 18) 三宅宗悦 「周防國吉敷郡山口町糸米山口高等學校校内土器包含地発掘調査報告」(『山高郷土史研究会考古学研究报告書』、1927年)。
- 19) 山口県教育委員会 『下東遺跡・萩峠遺跡』(1975年)。
- 20) 弘津史文 「周防國赤妻古墳並茶臼山古墳(其二)」(『考古学雑誌』18-5、1928年)。山口市教育委員会 『茶臼山古墳・大判石棺調査報告書』(1978年)。
- 21) 山口県教育委員会 『朝田墳墓群N・糸米遺跡』(1979年)。
- 22) 森江直紹・辻田耕次 「萩峠石棺(山口市)」(『山口県文化財第4号』、1974年)。
- 23) 山口県教育委員会 『朝田墳墓群II・鴻ノ峰I号墳』(1977年)。
- 24) 山口県教育委員会 『しらいし古墳群』(1980年)。
- 25) 注21)に同じ。
- 26) 山口大学文化会考古学部 『活動報告書2』(1978年)。
- 27) 注20)に同じ。
- 28) 注2)に同じ。
- 29) 永正15年(1518年)に伊勢神宮より勧請を計画し、17年に完成している。
- 30) 田村哲夫 「信仰と社寺」(『山口市史』各説編、1971年)。
- 31) 紀州より勧請。
- 32) 弘治3年(1557年)築城。
- 33) 弘治3年に大内義長の残党がここで兵を挙げた。内田伸 「大内時代」(『山口市史』、1982年)。
- 34) 注12)に同じ。
- 35) 注24)に同じ。

3 層位・遺構

〈小学校運動場〉

Aトレンチ (Fig.74~76 PL.54~59)

運動場北西隅付近に設定した6m×2mのトレンチである。層序は北壁で観察すると地表面下4~20cmまでグラウンド整地の①真砂土や②石炭殻が覆い、その直下西半部は一部後世の溝(SD2-遺物未検出のため時期不明)等で切断されるが、古墳時代の遺物を包含する黒灰色粘質土が約40cmと厚く堆積し、さらに同じく包含層の⑧黒色粘質土が続く。東半部でも近年布設の運動場整備に伴う排水溝があり下部堆積層を壊しているが、東から西下りの傾斜面をもって堆積する青灰色粘土・黒色粘土が確認できる。これらの堆積層は地表面下約60cm(中央部)を上限とする青灰色粘土をベースとしており、その上面は北壁中央から両端にかけては

平坦であるが、東半部で段を呈し、そして一部攪乱で明確ではないが東端で漸次的に東上方へ立ち上る様相を見せている。青灰色粘土上面の段差は南東に向けて直線的にのびており、また西壁からも東方へ走向する段がある。この段稜に挟まれた部分の直下に堆積する黒色粘土は、植物腐敗土を有し、かつ多くの自然木、木器等を包含していることから、堆積に際しては明らかに水の集積を伴っていたこ

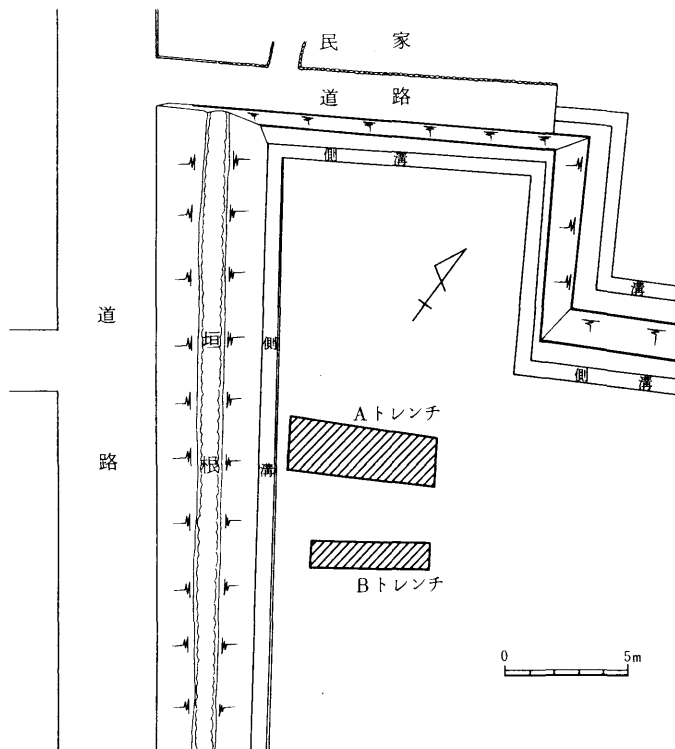


Fig.74 A・Bトレンチ設定図

層位・遺構

とを窺わせているとともにこの部分が無遺物層の青灰色粘土を遺構下面とした遺構の存在が推定できる。その性格としては溝、沼池、小河川、それに伴う澱部分など水に関連した遺構の推測がなされるが、しかし現段階では調査範囲稀少のため断定するまでには確証を得ない。（一応SD1と称する）また、⑧黒色粘質土より上層の⑦黒灰色粘質土も

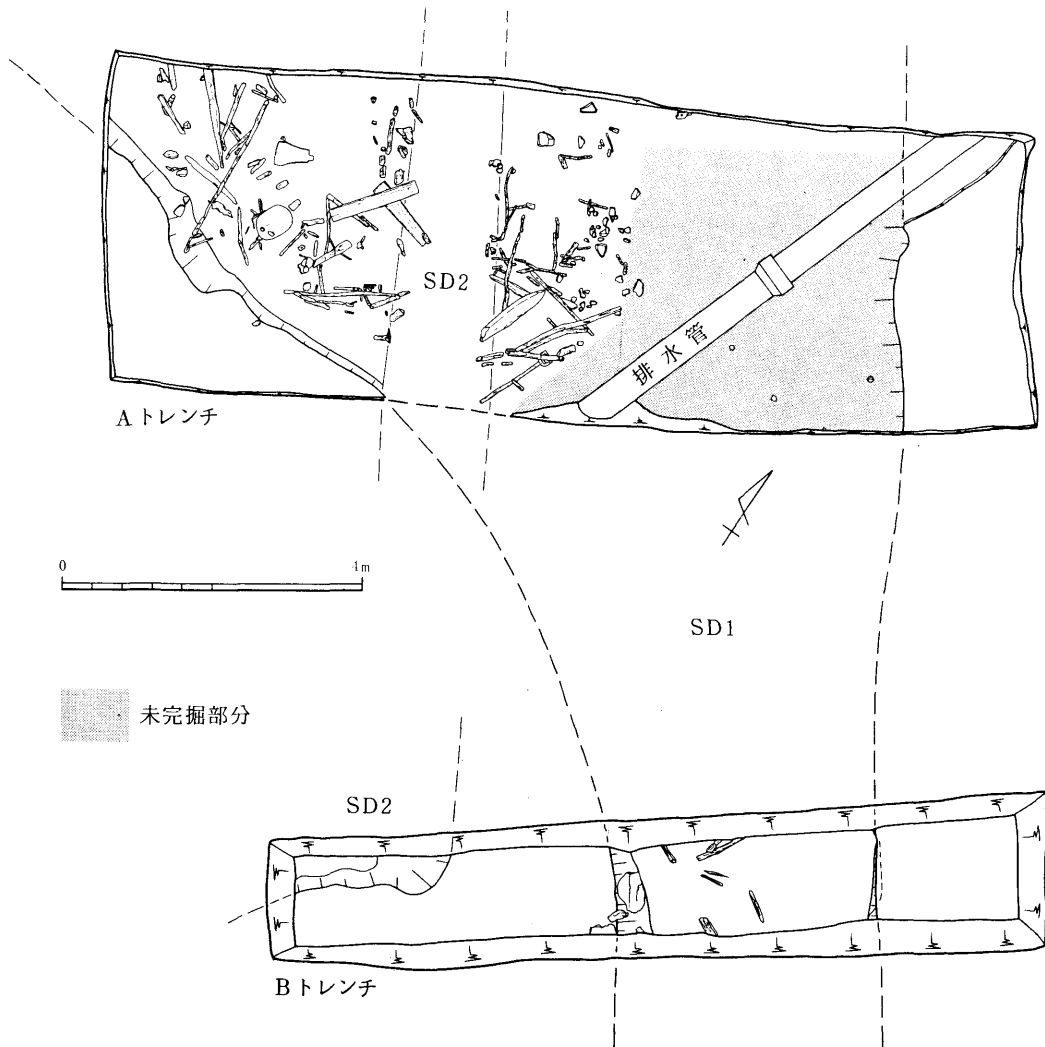


Fig.75 A・Bトレンチ遺構配置図

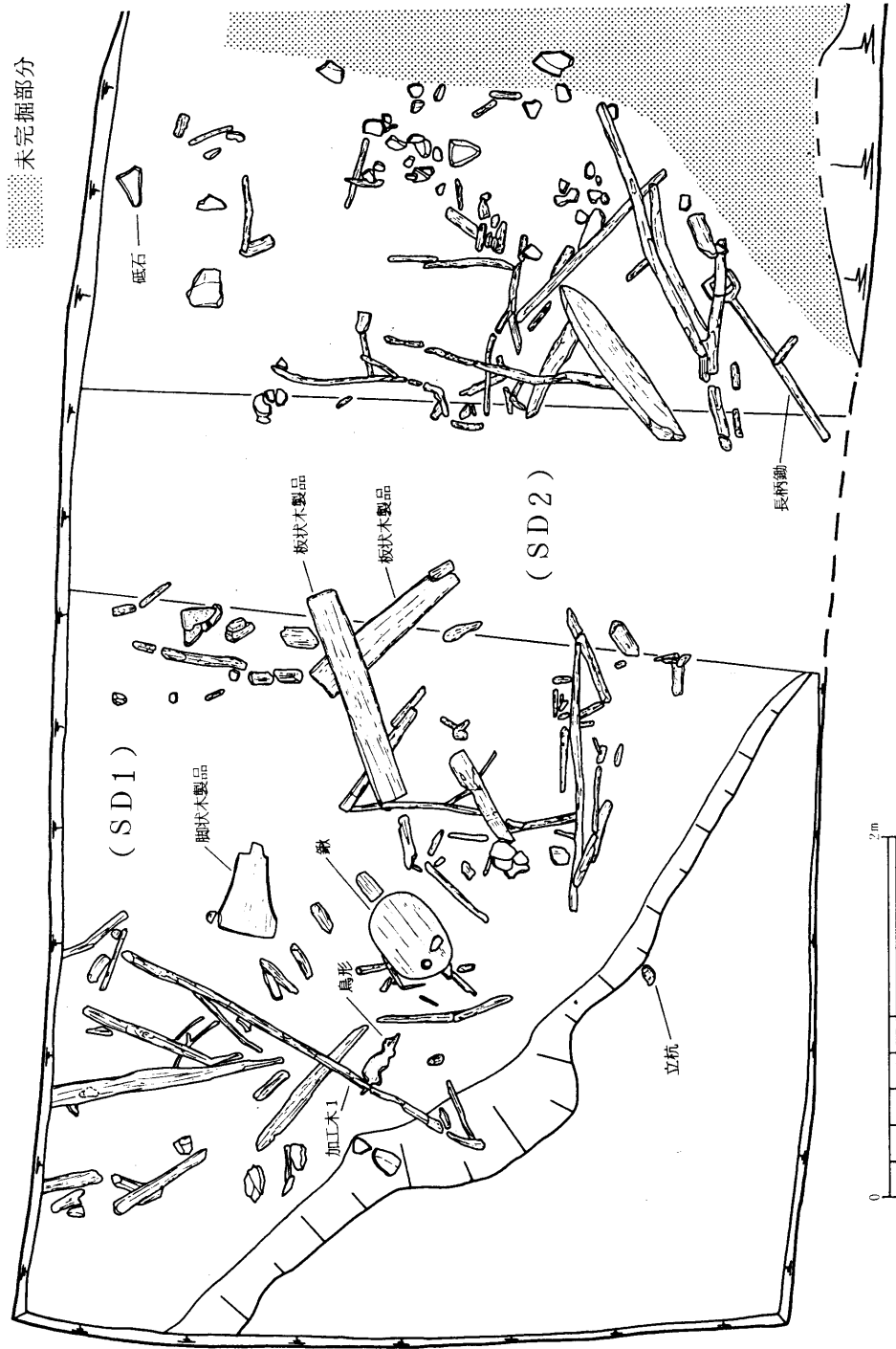


Fig.76 Aトレンチ遺物出土状況図

層位・遺構

SD1内の埋土の可能性も十分考えられる。それは⑧黒色粘質土より先行堆積する⑨青灰色粘土・⑩黒色粘土が⑧層上面より上位まで延びていることと、ベースである⑪青灰色粘土が北壁東端で立ち上りを予想させるため、トレンチ内で検出した段稜線はSD1内下部における一段差かもしれない。但し、仮にその場合でも当トレンチ範囲内では両肩部が明確にされないことおよび⑧層と⑦層では遺物に時期差（下限）が認められること（⑦層内がさらに細分される可能性もある）などから現時点この問題は保留し今後の調査を待つて結論づけたい。また、SD1段落ち肩部上面の数箇所に木杭が打ち込まれており、護岸用施設に伴う可能性が高い。なお、工期の関係で⑨層・⑩層はほとんど掘り込まなかったが、⑨層は無遺物層で、⑩層は遺物包含層であることは確認した。

Bトレンチ (Fig.74, 75 PL.54)

Aトレンチで検出した遺物包含層・遺構の拡がりや方向をより明確にする目的で、南方向5mの間隔をもって設定した5m×1mのトレンチである。地表面から10～20cmまでは整地土で、その下はAトレンチと同様すぐに古墳時代の包含層が堆積し、青灰色粘土をベースとする。東寄りの部分には深さ40cmの溝状の落ち込みがあり、Aトレンチの両段稜線に続くと思われる。また青灰色粘土上面の遺物包含層の中にはAトレンチの⑦層と同じくSD1内埋土の可能性のものもあると考えられるが、調査範囲が狭いため明確にできない。さらに西寄り部分ではSD2に関連すると察する後世の落ち込みが検出された。

Cトレンチ (Fig.72 PL.60)

Aトレンチの東側に設定した5m×2mのトレンチである。地表面下6～10cm間はグラウンド整地土であり、その直下、トレンチ内西半の一部においてA・Bトレンチ地点に拡がる遺物包含層と同様な土質の暗灰色粘質土が非常に薄く堆積している。それ以下50～70cmまでは比較的短時間で自然堆積した状況を示す淡灰橙茶色砂礫や淡青灰橙色砂礫などの砂礫層が厚くある。さらに50～100cm間には土器等の遺物は認められなかったものの多量の植物遺体や炭化物を含む黒灰色粘土があり、その下の青灰色粘質土をベースとして一時この地が沼地状様になっていた可能性が看取できる。

Dトレンチ (Fig.72 PL.60)

Cトレンチの東側、運動場の北東隅に位置する地点に設定した約3m×2mのトレンチ

教育学部附属山口小学校・幼稚園構内の試掘調査

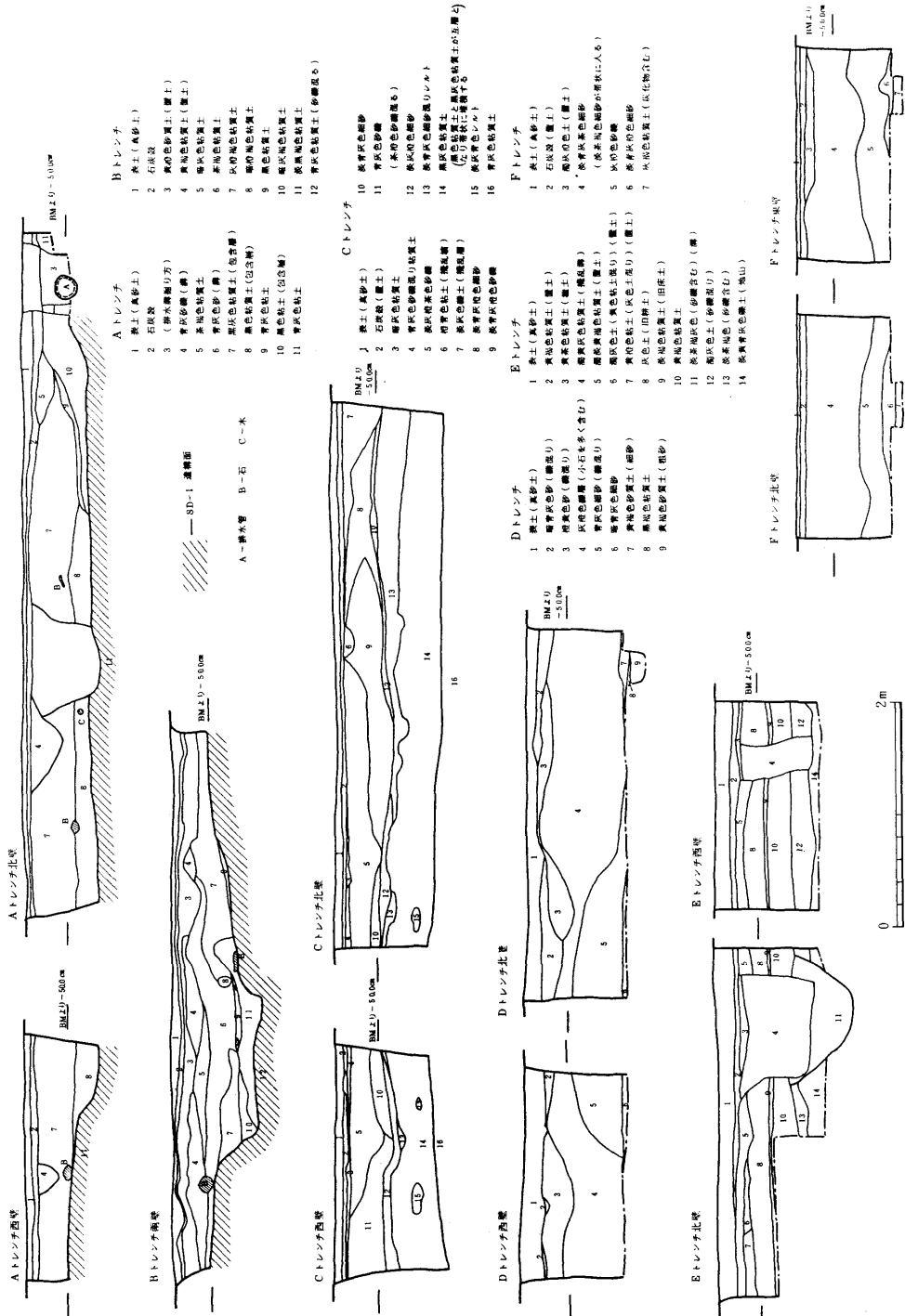


Fig.77 A~Fトレンチ土層断面図

層位・遺構

である。土層の堆積状況はCトレンチと比較的相似しているが、古墳時代の遺物包含層と考えられる土の堆積は全く認められない。なお、トレンチ下位にはCトレンチで確認された有機物を含む粘土層に関連すると思われる黒褐色粘質土がある。

Eトレンチ (Fig.72 PL.63)

運動場中央部西側の地点に設けた3m×1mのトレンチである。地表面下30～36cmまでは整地土・埋め土で、30～50cmの間に旧耕作土および床土を残すが、一部深さ90cmまで達する攪乱層がある。なお、調査過程において一旦床土のベースである黄褐色粘質土上面で遺構の確認を行なったが検出されず、以下トレンチ東半部を掘り下げた結果、淡茶褐色土上面から掘られている幅1.1m・深さ50cmの溝を検出した。この溝は北西から南東に向けて直線的に延びており、下部は地表面下90cm前後よりある地山部を切り込む。埋土は淡茶褐色灰色土の単層。時期は出土遺物が瓦一片のため断定し難いが、一応、中世頃と推定する。

Fトレンチ (Fig.72 PL.63)

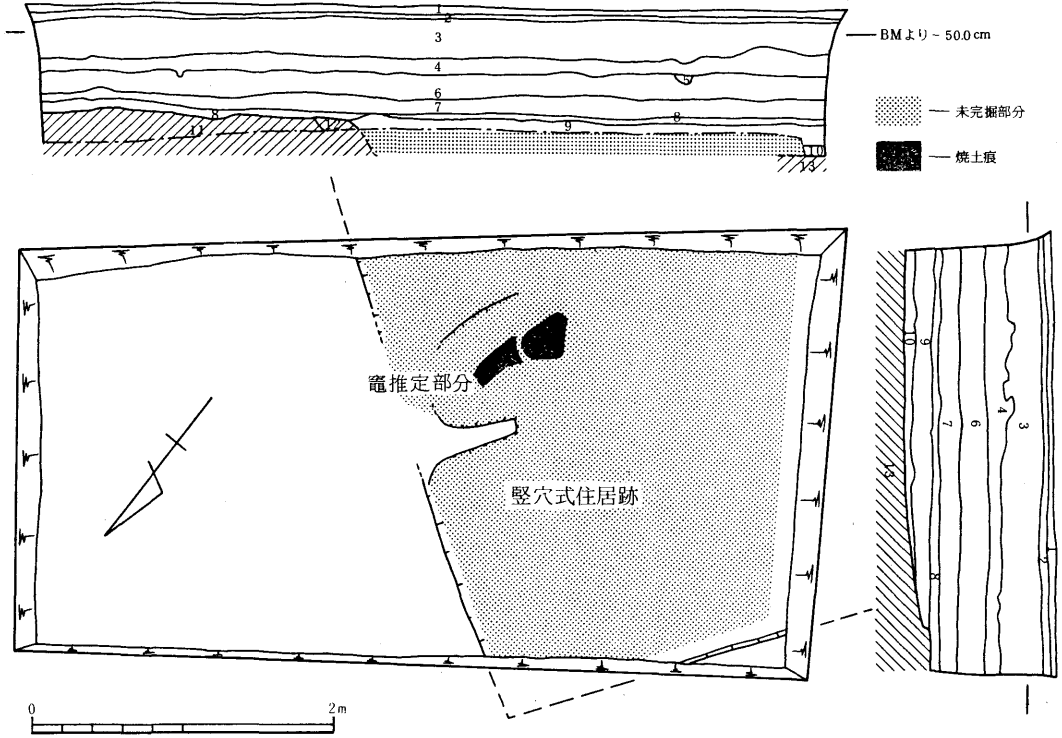
運動場中央部東寄りの地点に設定した2m×2mのトレンチである。地表面下8～15cmまでは整地土等で、その下は遺物を包含しない砂層・礫層の自然堆積層が厚く堆積する。地表面下90cm前後から堆積する灰褐色粘質土は、遺物は出土しないものの炭化物を含んでおり、C・Dトレンチで認められた有機質の黒灰色粘質土等に関連する可能性もあるが現時点明確ではない。

Gトレンチ (Fig.78 PL.61, 62)

運動場南端中央に設定した約5m×3mのトレンチである。地表面下40cmまではグラウンド整地土・埋め土で、その下、地表面下約30cm前後と約60cm前後に旧耕作土と察する層の拡がりを認めた。ただし、この上下二枚の水田面の時期については遺物未検出のため不明である。さらに地表面下70cmの淡灰褐色砂質土の堆積層上面で黒褐色粘質土を上位埋土とした遺構を確認した。この遺構は方形プランと推定される竪穴式住居跡で、当トレンチ内ではその壁面二辺の一部を検出した。床面までの深さは約20cmと浅く、直上に遺物包含層が伴わないことも加え勘案すると住居跡上部は多少なりとも削平されていると思われる。また、北辺にあたる一壁面から住居内部に向かって黄色粘土が突出しており（一側辺は彎曲気味に）、その内側部に焼土痕が認められることから、ここに竈が設置されていることが推

定される。さらに推定焚口付近で完形にちかい甕二点などが検出された。

なお、工期の関係および今回の工事ではこの遺構に支障がないということから住居跡内部は完掘せず、全体に約10cm程度の掘り込みと西側周壁沿いおよび西南壁下での床面検出、確認に留め、今後のため現状保存した。



- | | | |
|---------------------|------------------------------|----------------------|
| 1 表土 (真砂土) | 6 淡橙色土 | 11 淡灰褐色砂質土
(礫を含む) |
| 2 石炭殻 (置土) | 7 淡灰褐色砂質土 (旧耕作土Ⅱ) | 12 灰褐色シルト |
| 3 攪乱土 | 8 黄灰褐色シルト | 13 黄褐色粘質土 |
| 4 暗灰色砂質土
(旧耕作土Ⅰ) | 9 黒褐色粘質土 (住居跡埋土) | |
| 5 淡灰褐色シルト | 10 黒褐色 (黄褐色粘土混り) 粘質土 (住居跡埋土) | |

Fig.78 Gトレンチ遺構図・土層断面図

〈幼稚園運動場〉

Hトレンチ (Fig.79 PL.63)

幼稚園運動場の中央西側寄りの地点に2 m×1 mのトレンチを設定した。表土下に造成時の整地土・埋め土が地表面下50~60cmまで存在し、その直下に旧耕作土と考える青灰色土と、それに伴う床土と推定しうる淡灰褐色粘質土があり、それ以下は自然堆積層が続く。なお、当トレンチ内では遺構は検出されず、遺物も皆無であった。

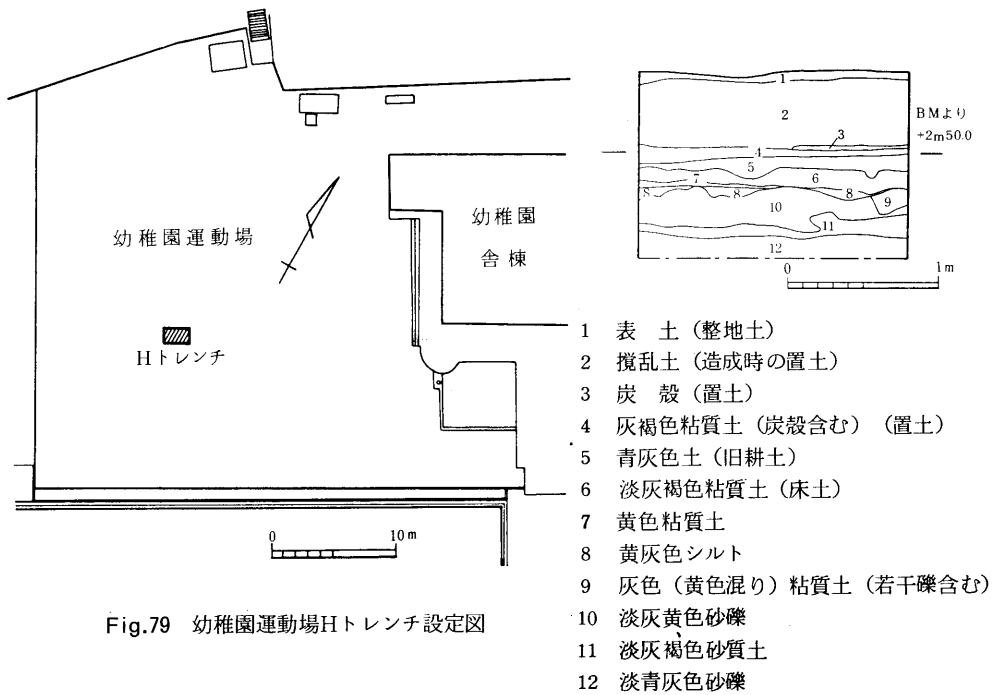


Fig.79 幼稚園運動場Hトレンチ設定図

Fig.80 Hトレンチ南壁土層断面図

4 遺物

遺物を検出したのは、A・B・E・Gの4トレンチであり、他にCトレンチの黒色土層から自然木が出土した。以下、Aトレンチ第8層、Aトレンチ第7層、Bトレンチ、Eトレンチ、Gトレンチごとに説明する。

Aトレンチ第8層（黒色粘土層）出土遺物（Fig.81 PL.64, 67～69）

第8層（SD1）からは土器・木器・石製品・植物遺体などの遺物が出土した。

土器

土器器甕（Fig.81, 1～9）1・2は複合口縁の甕で、頸部より屈折してさらに大きく外彎しながら立ち上る口縁をもち、1の口縁端部は丸くおさまる。調整は共に口縁部は横ナデ、体部内面篋削り。2は体部外面に刷毛目調整を施し、また体部器壁はかなり薄い。3～8は「く」の字状に外反する口縁部をもつ。3・4は内彎してのびる短い口縁で、3の口縁端部は上端に狭い面を呈し、4は若干外下方へ肥厚し丸くおさまる。調整は共に口縁部内外面共横ナデ、体部内面は篋削りを施す。5は大きく屈折して外上方へ直線的にのびる口縁で、端部は丸い。口縁外面は横ナデ、内面は左斜上りの刷毛目調整をする。6の口縁は斜外上方にのび、端部は丸い。口縁内面はナデ、外面は横ナデ、体部内面へ篋削り。7はわずかに外彎状に短く開く口縁である。口縁部の横ナデ、体部内面は篋削り、外面は横方向に篋磨きを施す。胎土は精選されている。8は外彎しながら大きくのびる口縁で、端部は面をなす。口縁内面はナデ、外面は縦方向の刷毛目、体部内面は篋削り、外面は右下りの刷毛目調整。9は甕体部上位の破片で、外面に比較的太目の左下りの叩きを施す。

土師器高坏（Fig.81 10～14）10・11は坏部である。10の坏底部は内彎しながらひらくやや深めのもので、口縁部は逆に外上方に反る。端部は丸い。内面は丁寧な篋磨き調整、外面は磨滅のため不明。また内面には煤が顕著に付着する。11は口縁が外上方に若干肥厚してのびる。坏底部との境に稜線が入る。口縁内面は右上-左下方向に丁寧な篋磨き、外面は刷毛目と縦方向の篋磨き。12・13は脚である。12は坏部接合面より内彎気味に広がる裾部で、三カ所に穿孔を施す。内面上位ナデ、下位刷毛目調整。13は器壁が厚い短めの中空の柱部から、屈曲して裾部が広がり、端部はわずかに外方へはねる。裾部の四カ所に穿孔がある。柱部内面はしぼり目痕を残し、裾部内面はナデ、外面は篋磨きを施す。14は外下方へ大きく広がる裾部である。端部に煤が付着する。裾部内面上位は篋削り、下位は刷毛目、外面は刷毛目調整後に縦方向に篋磨き。

遺 物

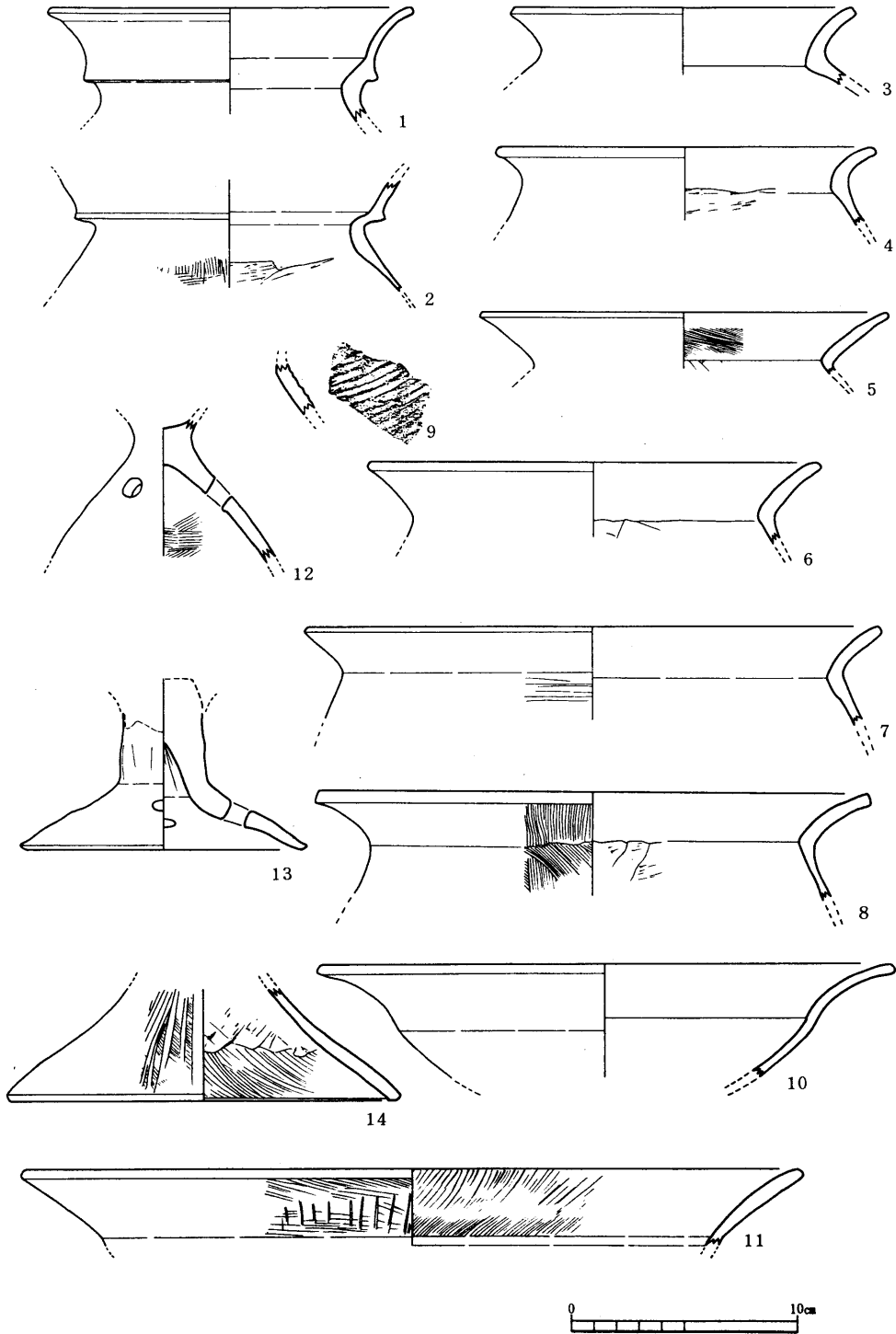


Fig.81 Aトレンチ第8層（黒色粘土層）出土土器（1）

木器¹⁾

鳥形木製品 (Fig.82) はほぼ完形である。形態は頭部が比較的大きく、前下方が先窄みになり嘴を表わす。最先端には径0.3cmの貫通孔一つを有する短い突起がつく。嘴と腹部間の頭部下面(喉部)には丸味をもつ突起を有する。背部は全体台形状様を呈し、背頂部は頭部頂より高位で直線的である。腹部は下方へふくらみをみせて切り欠きを施すが、後方に突起を残す。尾は尻部中位より小さく水平につき、断面は不整円形である。中程より外上方へ屈曲して先細りになり、その屈曲部分には斜め方向に一孔が穿たれる。なお、頭部中央両面には浅く削り凹みがあり、目が表現されている。技法は板目材の板を一枚用いて削り出しており、調整は全体的に粗い。面取りしている部分もあるが、周縁の切り欠き面には利器の削り痕が顕著に残る。孔は錐状の工具で穿たれたと察する。全長19.25cm、胴部幅5.4cm、最大厚1.7cm。なお、出土状況は加工木-1の柄穴部分に尾部が嵌った状態で検出された。

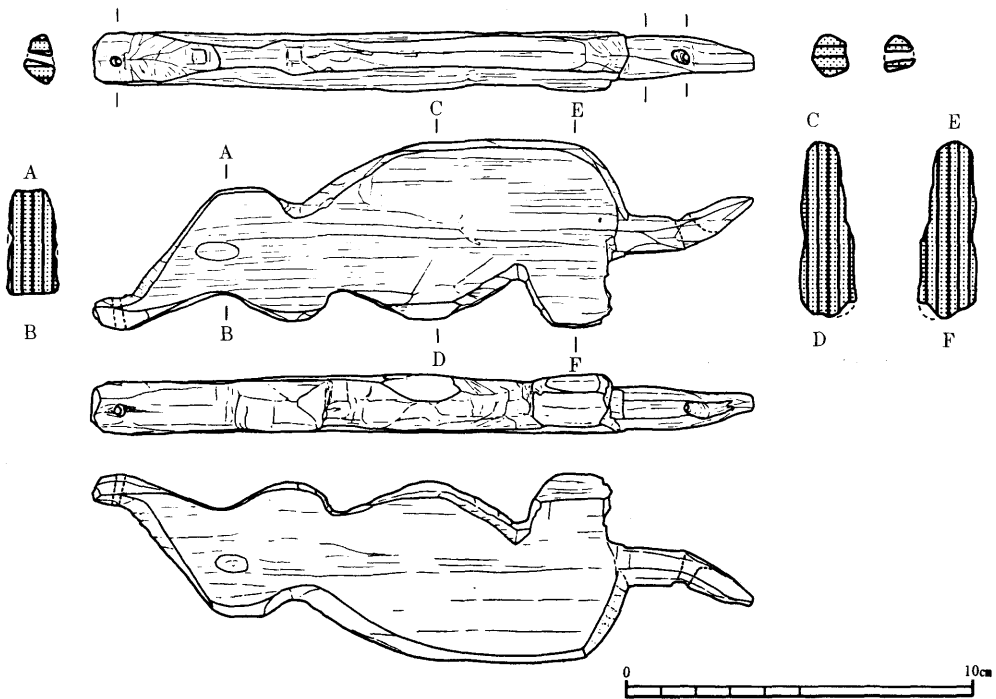


Fig.82 木器(1)

遺 物

加工木-1 (Fig.83, 1) 検出状況より鳥形木製品に伴う杆(竿)となる可能性をもつものである。全体わずかに反っているものの比較的直線的な枝を使用し、一部柄状になっている。遺存状態は下端が折損しており、また柄穴周辺から上端にかけ腐蝕が著しい。ただし、表面の大半部分で樹皮の残存が認められ、全体の表面加工はほとんど施されていないと思われるが、小枝は全て打ちはらわれているのかのびていない。柄は一端寄りに位置し、幅約1.5cmにわたって切り込んだ形を呈している。本来柄穴であった可能性も考えられるが腐蝕のため明らかではない。現存長106.0cm、最大厚2.9cm。

長柄鋤 (Fig.83, 2) 柄上部と把手の部分で、柄下部以下身は欠損する。柄部断面は円形。把手形状はㄇ字形を呈し、内部後方に7.2cm×2.3cmを測る長方形の比較的小さい割抜き部を有する。横木はわずかに左右に突出し他の部分より厚くする。内部前方には周縁に則ってU字状に巡る浅い凹線を施す。カン類の一木づくりで、縦木取りである。全体多少磨耗しているが丁寧な作りである。現存長59.9cm、把手長9.4cm、把手巾11.3、柄部厚さ2.1cm。

鍬 (Fig.84, 1) 身の完形品である。平面形が概して楕円形を呈し、中央に突起を施さないもので他にあまり類例をみないものである。全体に縛手で刃縁、頭部は共に大きく内彎しており両側縁は平行して直線的になっている。刃部は周縁沿いをわずかに外方へ削りつくりだしており、加工痕がみられる。柄孔は頭部寄りにあり、着柄角度約70°をもって穿たれている。柄は断面円形のものとする。全長25.7cm、最大幅17.6cm、最大厚1.2cm、柄孔3.3cm×3.1cm。樹種はカン類と思われる。なお、ここでは一応鍬身の完成品と考えているが形態的に多少疑問を残す。

脚状木製品 (Fig.84, 2) 柄差結合法による組み合せ式の木製品の脚¹⁾と考えるものである。器種は上部構造で異なるが、腰掛ないしは案・小机等と推定する²⁾。形状は縦長の台形を呈し、上端(短辺側)中央には上部の板の柄穴に挿入させるための突起が造り出している。下端は平坦面を呈し、部分的に焼けこげている³⁾。面脚部上部では突起方向にかけての工具痕が多く残る。全長25.1cm、脚長22.2cm、脚上端幅8.0cm、脚下端幅16.0cm、最大厚3.5cm、突起最大長3.2cm、突起幅3.5cm、突起厚2.0cm。

板1・2 (Fig.85, 1・2) 1・2ともに板状製品の一部であるが、いずれも付随的な加工がみられる。1は側面寄りに3.1cm×1.3cm、0.8cm×0.3cmの大小二つの方孔が穿つ。全体に磨耗している。現存長50.6cm、現存最大幅9.7cm、最大厚1.3cm。柱目材。2は一側面際に切り込みを入れ、そこには他のものを組み合せ結縛したと推定しうる幅

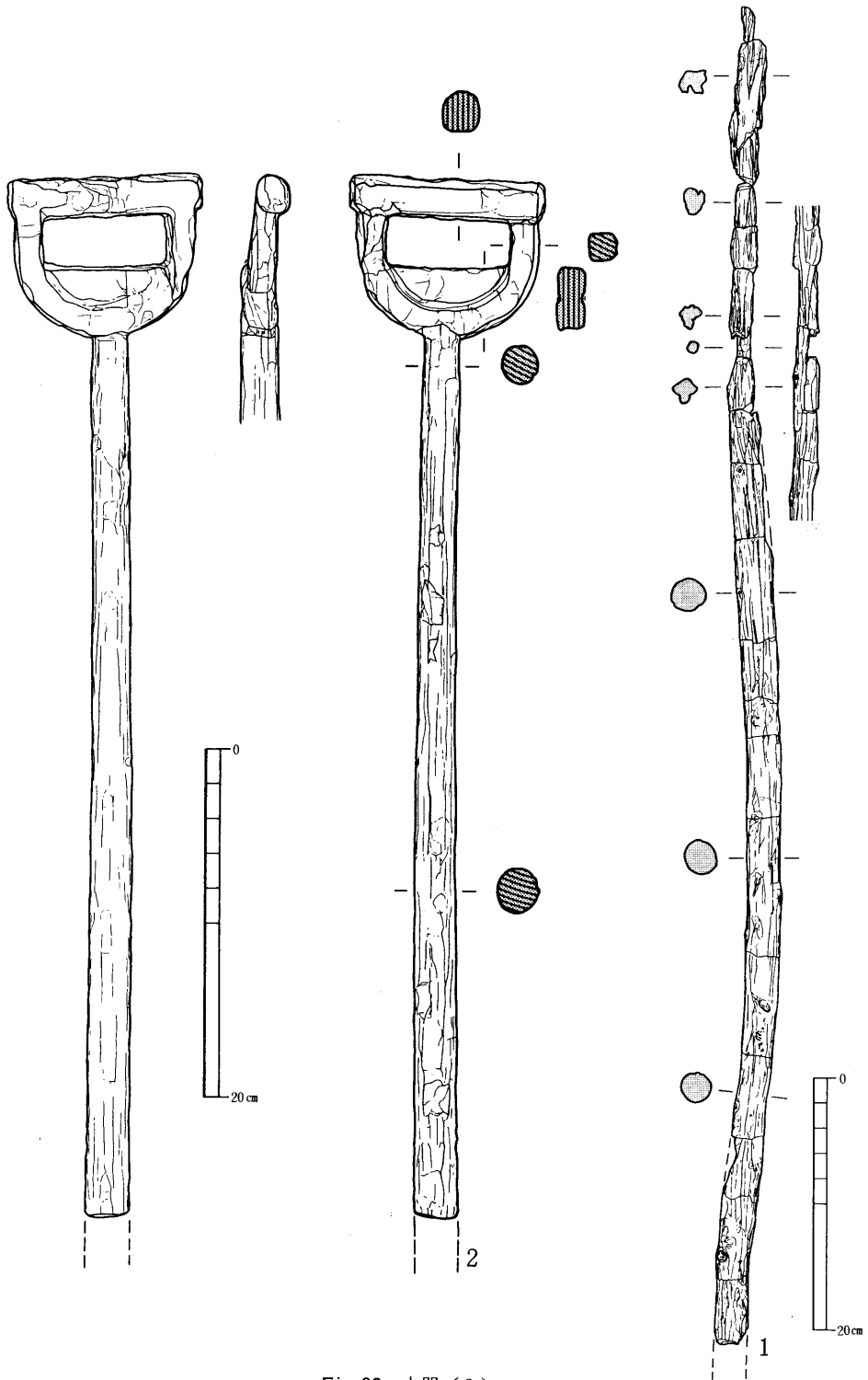


Fig.83 木器 (2)

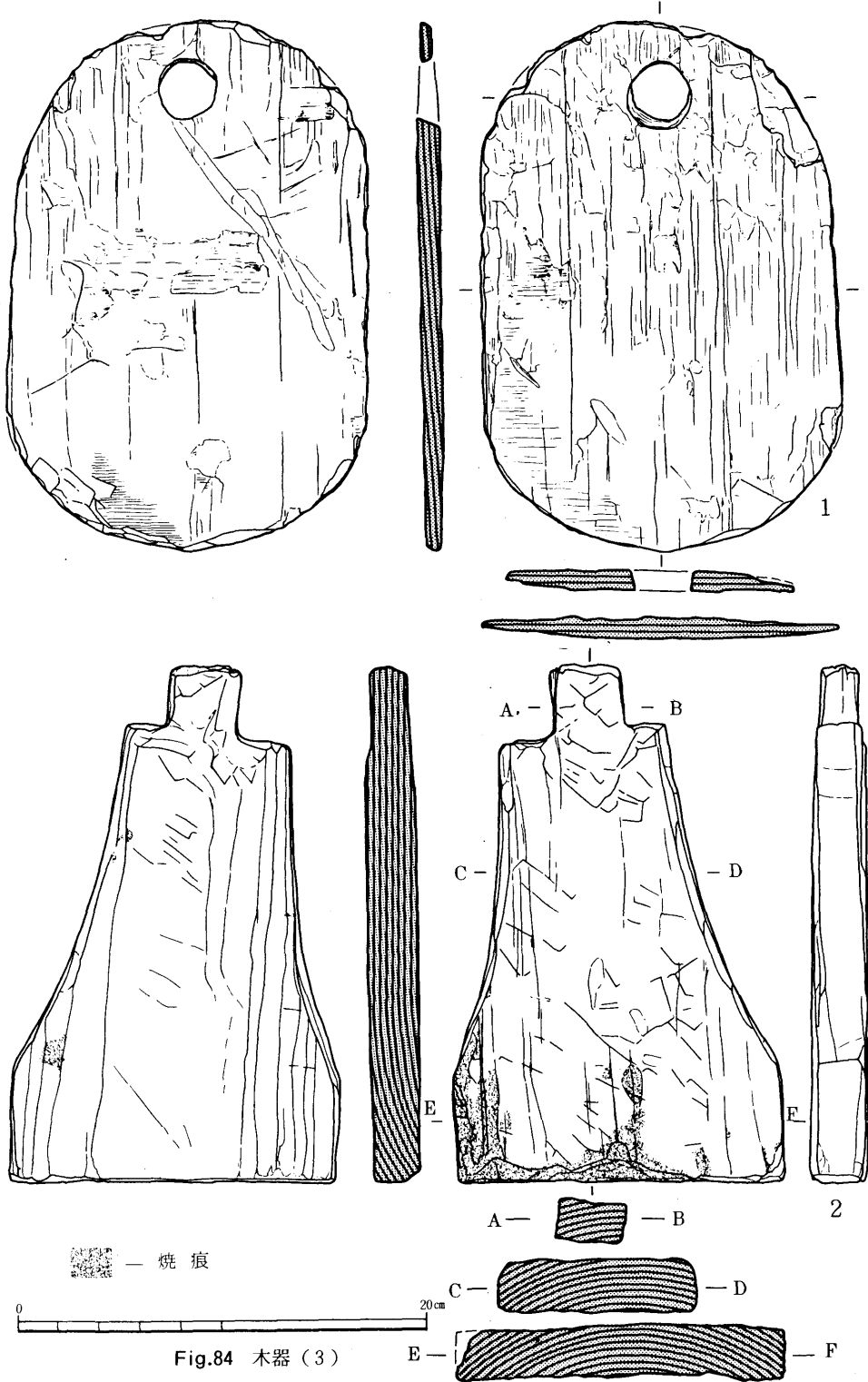


Fig.84 木器 (3)

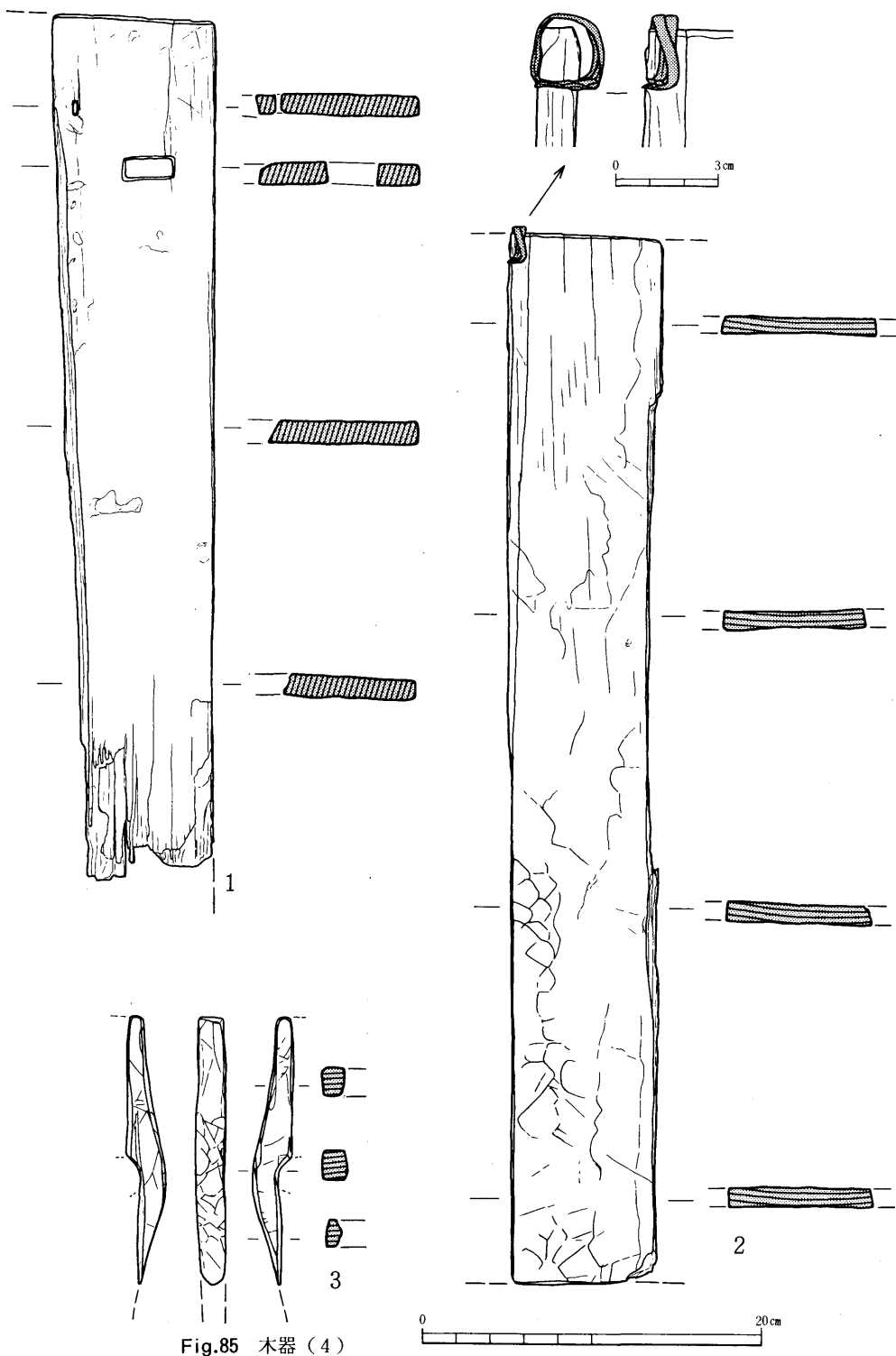


Fig.85 木器 (4)

0.3~0.5cmの桜の樹皮が通しており、現状では一部2重の輪になっている。全長61.4cm、現存幅8.7cm、最大厚1.2cm。柾目材。

用途不明品1 (Fig.85, 3) 欠損品で全体の形状は不明である。両面は平坦で、側面は緩やかにカーブを描く。中央には穿孔を有すると思われる他、側面には多数の細かな加工痕跡が観察できる。現存長15.7cm、最大現存幅2.2cm、最大厚1.8cm。

石製品その他

砥石 (Fig.86) 折損面を除き、各面が研砥面として使用されており、とくに記載面は使用度が少ない。全体二次的な磨滅をうけているが、部分的に研磨痕、擦痕が残る。現存長10.4cm、幅6.6cm、最大厚3.4cm。

植物遺体(種核)(PL.63) 植物種子としてモモ (*Prunus Persica*) の核が出土した。

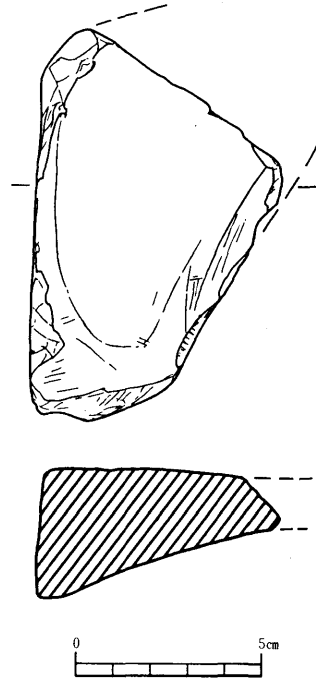


Fig.86 石製品

Aトレンチ第7層(黒灰色粘質土)出土遺物 (Fig.87 PL.65)

この層からは土器類が多量に出土したが、細片が多い。

土器

土師器・壺 (Fig.87, 1~3) いずれも複合口縁壺の口縁部の破片である。1は大きくひらいた後、さらに外斜方に短かくのびる。上半部横ナデ。2は短い直立の口縁上段部分で、上端部は面をなし、外面には5条の櫛描き波状文を施す。下端は貼り付け面である。調整は内外面共横ナデで、内面には一部指頭痕がある。3はいわゆる籬状部分で上面に口縁上段部の貼り付け痕跡が残る。外面横ナデ、2の破片と直接接合しないが、同一個体の可能性がある。

土師器・甕 (Fig.87, 4~18) 4は小型の甕で、口縁は短く外反し、体部は肩がはらず、最大腹径は口径よりも小さい。口縁内外面横ナデ、体部内面篋削り、外面磨滅のため不明。5~7は複合口縁のもつもので、口縁は外彎して立ち上る。端部は丸く終るもの(6)とやや面を呈するもの(5)がある。いずれも内外面共横ナデ。8~18はくびれ部が「く」

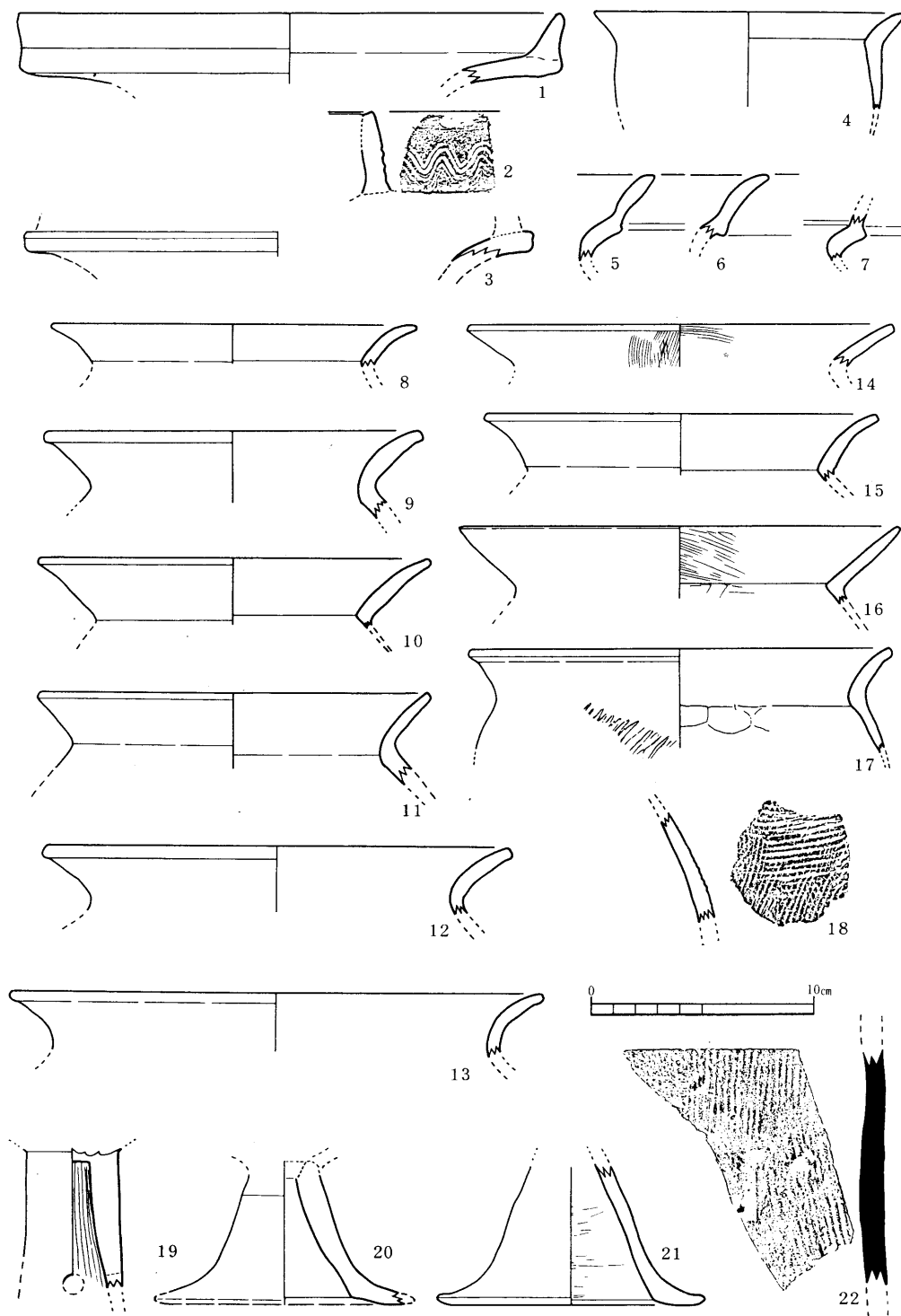


Fig.87 Aトレンチ第7層（黒灰色粘質土層）出土土器

遺 物

Tab.18 出土土器観察表(1)

No	器 種	口 径 底 径 (cm)	器 高 (現存高) (cm)	色	調	胎 土	焼成	備 考
A トレンチ黒色粘土層出土土器								
1	土師甕	15.8	(4.7)	外面-暗灰黄色(2.5Y) 内面-一部にぶい黄褐色(10YR)		0.1~0.2cmの砂粒多含	良好	煤付着(外)
2	土師甕		(4.7)	灰黄褐色(10YR)		精良 微砂少量	良好	煤付着(外)
3	土師甕	14.8	(3.4)	灰黄色(2.5Y)		精良 0.2~0.7cmの小石若干	良好	煤付着(外) 口縁内面に黒斑
4	土師甕	16.2	(3.4)	外面-にぶい黄褐色(10YR) 内面-にぶい黄褐色(10YR)		0.1~0.2cmの砂粒含む	良好	煤付着(外)
5	土師甕	17.7	(2.7)	外面-灰黄褐色(10YR) 内面-にぶい黄褐色(10YR)		0.1cm程度の砂粒含む	良好	煤付着(外)
6	土師甕	19.6	(3.6)	灰黄色(2.5Y)		0.1~0.2cmの砂粒含む	良好	煤付着(外)
7	土師甕	25.0	(4.4)	浅黄褐色(10YR)、体部内面-黒色(N)		精良 微砂少量	良好	
8	土師甕	24.3	(4.9)	橙色(5YR)		0.1cm以下の細砂多含、 くさり礫含む	良好	煤付着(外)
9	土師甕			橙色(5YR)		0.1~0.2cmの砂粒含む	良好	
10	土師高坏	25.0	(5.0)	外面-にぶい黄褐色(2.5Y) 内面-灰黄褐色(10YR)		0.1~0.2cmの砂粒含む	良好	煤付着(内外)
11	土師高坏	34.2	(3.35)	にぶい黄褐色(10YR)		0.1~0.2cmの砂粒多含	良好	
12	土師高坏		(6.4)	にぶい黄褐色(10YR)		0.1~0.2cmの砂粒含	良好	3孔
13	土師高坏	12.2	(7.5)	にぶい黄褐色(10YR)		0.1cm以下の細砂多含、 くさり礫含む	良好	4孔
14	土師高坏	16.4	(4.9)	灰黄色(2.5Y)		0.1cm以下の細砂含	良好	煤付着(内端部) 黒斑有
A トレンチ 黒灰色粘土層出土土器								
1	土師壺	14.2	(3.2)	外面-橙色(7.5YR) 内面-浅黄褐色(7.5YR)		0.1~0.2cmの細砂多含	やや軟	
2	土師壺		(3.7)	にぶい黄褐色(10YR)		0.1~0.4cmの砂粒多含	良好	
3	土師壺		(1.3)	にぶい黄褐色(10YR)		0.1~0.4cmの砂粒多含	良好	2と同一の可能性あり
4	土師甕	13.6	(4.4)	外面-浅黄褐色(10YR) 内面-橙色(2.5YR)		0.1~0.5cmの砂粒多含	やや軟	
5	土師甕		(3.9)	外面-淡黄色に近い灰白色(5Y) 内面-灰色(N)		0.1~0.3cmの砂粒少量	良好	
6	土師甕		(3.9)	灰黄褐色(10YR)		0.1~0.2cmの砂粒多含	良好	煤付着
7	土師甕		(2.1)	外面-にぶい黄褐色(10YR) 内面-淡黄色(2.5Y)		細砂少量	良好	
8	土師甕	16.1	(1.9)	灰黄色(2.5Y)		0.1~0.2cmの砂粒少量	良好	
9	土師甕	16.6	(4.0)	外面-灰白色(2.5Y)、内面-灰黄色(2.5Y)		精良 微砂少量	良好	煤付着(外)
10	土師甕	16.2	(3.1)	外面-灰白色(2.5Y)、内面-黄灰色(2.5Y)		0.1~0.2cmの砂粒含む	良好	口縁内面に黒斑
11	土師甕	17.3	(4.1)	浅黄褐色(10YR)		0.1~0.3cmの砂粒含む	良好	煤付着(外)
12	土師甕	20.6	(3.1)	外面-にぶい褐色(7.5YR) 内面-にぶい褐色(7.5YR)		0.1~0.2cmの砂粒含む	良好	煤付着(外)
13	土師甕	23.6	(2.9)	外面-浅黄褐色(7.5YR) 内面-浅黄褐色(10YR)		0.1~0.4cmの砂粒多含、 くさり礫含む	やや軟	
14	土師甕	18.8	(1.9)	にぶい黄褐色(10YR)		0.1~0.2cmの砂粒含む	良好	
15	土師甕	17.2	(3.0)	外面-にぶい黄褐色(10YR) 内面-灰白色(2.5Y)		0.1~0.3cmの砂粒多含	良好	
16	土師甕	19.3	(3.5)	外面-にぶい黄褐色(10YR) 内面-灰黄褐色(10YR)		0.1~0.4cmの砂粒多含、 くさり礫含む	良好	
17	土師甕	18.5	(4.7)	灰黄褐色(10YR)		0.1~0.2cmの砂粒少量	良好	煤付着(外)
18	土師甕		(5.2)	にぶい褐色(7.5YR)		精良 微砂少量	良好	煤付着(内、外)
19	土師高坏		(6.3)	灰白色(2.5Y)		精良	良好	
20	土師高坏		(6.5)	外面-灰黄褐色(10YR) 内面-にぶい黄橙(10YR)		精良	良好	
21	土師高坏	10.0	(6.9)	淡黄色(2.5Y)		精良	良好	
22	須恵器壺		(10.8)	外面-青灰色(5B)、内面-灰白色(N)		密	堅緻	

* 色調は農林省農林水産技術会議事務局監修
「新版 標準土色帖」に準じた。

の字形になるタイプである。大半は口縁が外彎気味に外方にのびるが、16は直線的である。口縁端部は全体が丸くおさまるもの（8・10・16・17）と若干外下方に肥厚して丸く終るもの（9・12・13）、面を呈するもの（11・14・15）とに分けられる。なお11の口縁端部は部分的に外下方へ肥厚している。また、くびれ部内面が丸味をもつものと稜をなすものがある。調整は口縁内外面共に横ナデ（8～10・13・17）内面粗い刷毛目・外面横ナデ（12・16）、内面横方向の刷毛目・外面縦方向の刷毛目（11・14）などがある。体部内面はいずれも篋削りで、外面は17で左下りの叩き目が認められる他は欠損して不明。18は甕の体部の破片で、比較的細い叩き目を有し、さらに粗い刷毛目調整が施されている。

土師器・高坏（Fig.87, 19～21） すべて脚部である。19は中空で柱状を呈し、3カ所に孔を施す。内面はしぼり痕が顕著に残り、外面は磨滅のため調整不明。20・21は裾部に至り大きく屈曲し、水平ちかくなる。21の端部は上方にやや肥厚気味に丸くおわる。20は外面および内面裾部をナデ、脚部を篋削り後回転ナデ。21は脚部内面を篋削りで、外面は磨滅のため不明。

須恵器（Fig.87, 22） 壺ないし甕の胴部の一部分である。外面は平行叩きを施すが、器表には指頭痕のため凹凸がある。内面はスリケン。

B トレンチ（包含層）出土遺物（Fig.88 PL.64）

当トレンチからは土器類の他、落ち込み部分で自然木等が出土した。

土 器

土師器・壺（Fig.88, 1） いわゆる大型の複合口縁壺である。頸部は斜外上方にのび、上位でさらに屈曲して内面に段を呈する。口縁部は頸部の上端部に貼りつき、わずかに内彎して外上方に立ち上る。口縁端部はやや丸く終る。全体器壁は厚く9mm前後を測る。内外面とも篋磨きと思われるが磨滅のため不明瞭。

土師器・甕（Fig.88, 2～5） 2・3は外上方へ内彎気味に立ち上る複合口縁で、屈折部分外側は稜をなす。2は口縁端部は丸い。調整は内外面共に1は横ナデ、2は横方向に篋磨き。4・5は「く」の字形に短く外彎して外反する口縁をもつもので、4の口縁端部は浅い沈線が巡り外側に狭い面を呈する。5の端部は丸く、体部は肩が張らずになだらかに下る。両者共に口縁部は横ナデ、体部内面は篋削り、外面は縦方向に刷毛目調整。

土師器・高坏（Fig.88, 6・7） 6は脚部で、端部は内側に若干肥厚する。内面は刷毛目、外面は篋磨きで、刷毛目痕も認める。7は坏部である。内面坏底部とは口縁部

の境に稜をなし、口縁は外上方に大きく外反する。端部は丸い。調整は磨滅のため不明。

須恵器・坏 (Fig.88, 8) 坏身の底部で、断面逆台形状の低い高台が貼りつく。調整は内外面共に回転ナデ。

瓦質土器・土鍋 (Fig.88, 9) 口縁上端は面をなし、外周に鋸が貼りつく。体部はゆるやかに内彎しながら下る。内面は横方向へ粗い刷毛目、鋸・口縁上面は横ナデ。外面は顕著に煤が付着する。(包含層上位出土)

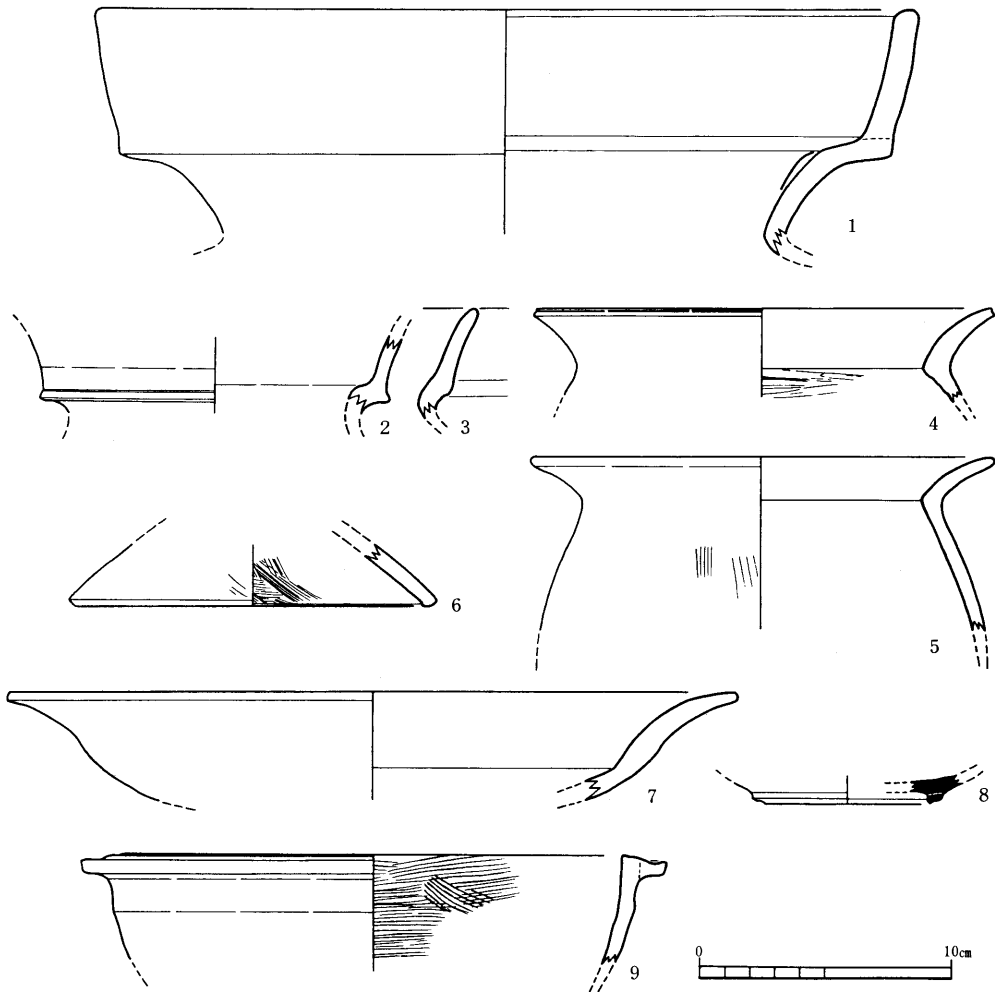


Fig.88 Bトレンチ出土土器

E トレンチ出土遺物

(Fig.89 PL.67)

丸瓦 後部片である。玉縁をもつもので、幅約3cmを測る。凸面はヘラ磨き、凹面は、細かい布目痕がわずかに残る。色調灰白色。胎土は砂粒を多く含む。時期は中世と思われる。(溝内出土)

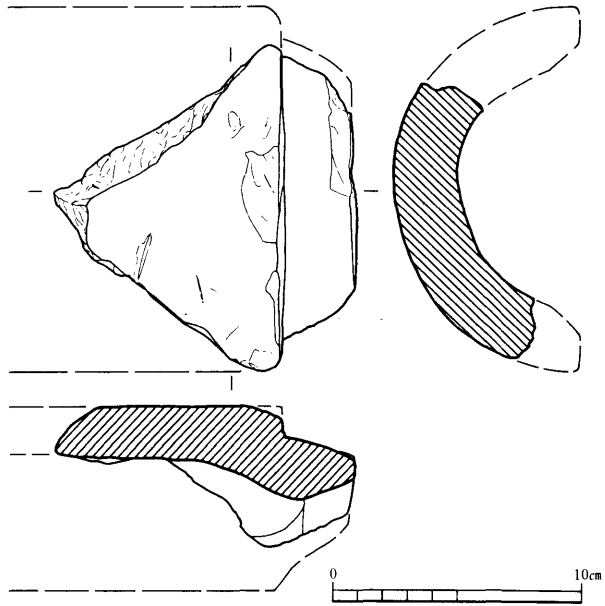


Fig.89 E トレンチ出土瓦

G トレンチ (竪穴式住居跡内)

出土遺物 (Fig.90 PL.67)

竪穴式住居跡内の埋土上層である黒褐色粘質土から、完形をちかいものを含めた土師器類が出土した。

土 器

土師器・壺 (Fig.90, 1・2) 1は外上方に先窄みながらのびが短い口縁をもつ、体部は肩が張らずに下る。口縁部は横ナデ、体部内面は篋削り。2の口縁は体部よりそのままのび、先窄みである。器壁は厚く、底部は平らをなす。調整は全体にナデ。

土師器・甕 (Fig.90, 3～5) 3は外彎しひらく口縁をもち、片口を有する。端部は面をなす。体部は最大腹径(23.7cm)が体高の中位にあって、球形を呈する。外底部はわずかに平底気味である。口縁部は横ナデ、体部内面は篋削り。外面は刷毛目調整を施すが、指頭による凹凸が残り全体的に整形が粗い。4はわずかに内彎気味に立ち上る口縁で、端部が若干外へ肥厚し上端は面をなす。体部は球形を呈し、最大腹径(27.0cm)が体高の中央よりやや上に位置する。器壁は薄い。口縁部は横ナデ、体部内面はナデ仕上げ、外面は比較的細かい刷毛目調整。5は球形の体部を呈し、底部はわずかに平坦面を有する。内面は篋削り、外面刷毛目。

土師器・鉢 (Fig.90, 6) 小型のもので、口縁先端はわずかに外反し、体部は外方へ張らず彎曲してのびる。口縁部および体部上位は横ナデ、体部下位は多方向に刷毛目調整。

遺物

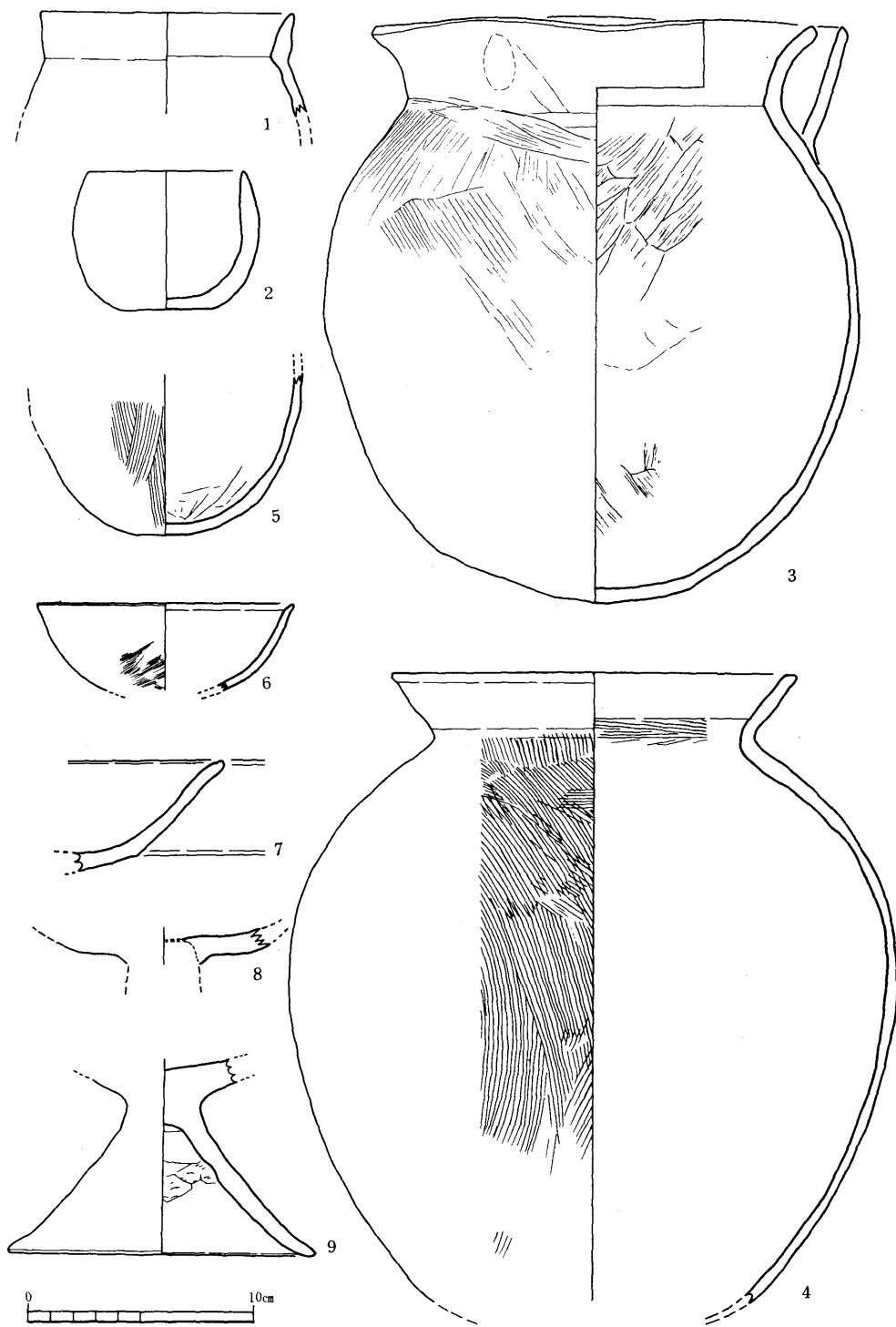


Fig.90 Gトレンチ（住居跡内）出土土器

教育学部附属山口小学校・幼稚園構内の試掘調査

土師器・高坏 (Fig.90, 7～9) 7は坏部上半部で、口径は小片のため明確できないが約20cm前後と思われる。概して直線的に広がり、上端部に至ってわずかに外反し、小さくつまみ上がる。調整は丁寧な篋磨き、8は坏底部分で、脚ははめ込み式となる。内面篋磨き、外面回転ナデ。9は全体が大きくひろく脚部で、坏底部よりほぼ直線的に外下方へのび、端部に至ってさらに外反する。坏底部は厚みがある。脚部上位内面篋削り、外面篋磨き、下位内外面共横ナデ。

Tab.19 出土土器観察表(2)

No	器種	口径 (cm)	器高 (現在高) (cm)	色調	胎土	焼成	備考
Bトレンチ							
1	土師壺	32.6	99	浅黄橙色(10YR)	精良 0.2cm程度の砂粒少量	やや軟	
2	土師甕		(32)	内面-にぶい黄橙色(10YR)	0.1cm程度の細砂含む	良好	
3	土師甕		(45)	浅黄橙色(10YR)	精良 微砂少量	やや軟	煤付着(外面)
4	土師甕	18.1	(38)	外面-黒色(10YR)、内面-褐灰色(2.5Y)	精良 細砂少量	良好	煤付着(外面)
5	土師甕	18.1	(7.0)	淡黄色(2.5Y)	0.1～0.3cmの砂粒多量、 くさり礫含む	良好	煤付着
6	土師高坏	14.2	(25)	外面-にぶい黄橙色(10YR) 内面-にぶい橙色(7.5YR)	精良 微砂少量	良好	
7	土師高坏	29.1	(44)	にぶい橙色(10YR)	0.1～0.2cmの砂粒含む	良好	
8	須恵器坏	6.6	(1.2)	外面-青灰色(5B) 内面-明青灰色(10BG)	精良 微砂含む	堅緻	
9	瓦質鍋	20.0	(44)	灰色(N)	精良 微砂少量	良好	煤付着(外面)
Gトレンチ(住居内)							
1	土師壺	13.6	(43)	橙色(5YR)	極めて精良 くさり礫含む	やや軟	
2	土師壺	6.8	5.15	橙色(5YR)	極めて精良	良好	
3	土師甕	19.4	26.05	橙色(5YR)	0.1～0.2cmの砂量含む	良好	煤付着(外面)
4	土師甕	17.9	(27.85)	にぶい橙色(5YR)	微砂比較的多く含む	良好	
5	土師甕		(7.1)	外面-浅黄橙色(10YR) 内面-淡黄色(2.5Y)	精良 0.1～0.2cmの砂粒若干	良好	煤付着(外面)
6	土師鉢	11.3	(39)	黒褐色(2.5Y)	精良 微砂少量	良好	
7	土師高坏		(49)	にぶい橙色(7.5YR)	精良 微砂少量	良好	
8	土師高坏		(16)	浅黄橙色(7.5YR)	極めて精良	良好	
9	土師高坏	(13.4)	(8.7)	にぶい橙色(7.5YR)	極めて精良	良好	

(注)

- 1) 小林行雄 『続古代の技術』(1964年)。
- 2) 奈良国立文化財研究所の町田章先生から「脇息」の可能性を御指摘、御教示を受けた。記して感謝いたします。
- 3) 突起部上面には結合を強固させるために直軸方向にそって中央に木楔が入れられている可能性がある。
京都大学の小野山節先生より来館の折り、御教示を受けた。記して感謝いたします。

5 小結

(1) 埋蔵文化財の調査結果と今後の方針

運動場面積は小学校・幼稚園の両者合わせて約6000㎡あるのに対し、今回の試掘調査総面積は約60㎡で全体の1%程度にすぎず、遺物包含層、遺構の分布範囲を明確にすることは極めて早計と考えるが、一応現時点でわかり得た結果について述べる。

まず小学校運動場では、古墳時代の遺物包含層・遺構および後世の耕作面積が運動場中央部から両端にかかるA・B・C・E・Gトレンチで確認された。検出された遺構を考えると、竪穴式住居跡は単独で存在することは稀で、普通数棟をもって集落を形成されており、また溝状遺構は機能上さらに広がると察せられる点などから、とくに西半部では広い範囲にわたって遺構が埋存している蓋然性が高く、今後この地域で工事を行なう時は十分な事前調査が必要と思われる。運動場東半部は遺物包含層、遺構が検出されなかったが、その要因は各トレンチの土層の比較および周辺の地形を勘案すると、旧地形は北から南へ、さらに東から西へ傾斜下向していると推定できるが、現在校舎・体育館等が建てられている敷地と小学校運動場の境が約1.5m程度段差があり後側が低くなっていることから、東半部は運動場造成に際して既に削平された可能性が大きいと察する。ただし、古墳時代より前代のものに関しては、本来の地山がEトレンチでしか確認できなかったため、現時点ではその有無は確定しがたい。

幼稚園運動場の方は、調査地点が1カ所だけで、その結果は運動場全域を包括して言えるものではなく、当トレンチに限ると小学校運動場に埋存していた古墳時代の遺物包含層に相当するものは全く無く、またそれ以前、以後の遺物の出土も無かった。しかし、地表面下60cm前後には旧耕作土や遺物包含層の可能性のある淡灰褐色粘質土があることから、今後深く掘り下げる工事に際しては調査が必要と思われる。

なお、今回の運動場整備工事に関しては、試掘調査直前にはほぼ完工したA・Cトレンチ付近の排水溝では、遺物包含層の一部が破壊された可能性もあるが、試掘調査以後行なった本工事（グラウンド整地土すき取り工事）は現整地土内での掘り返しに留めることで、直接埋蔵文化財に影響ないとし、改めて調査は実施しなかった。

(2) 遺構・遺物について

溝状遺構（SD1） A・Bトレンチで検出した溝状遺構は、前章で述べた通り現時点では規模・性格・機能等については明確に断定できないが、立地条件や出土遺物、さらに同構内で古墳時代の住居跡が検出されたことから察して、集落に関連する可能性が高いと

推測する。出土遺物はAトレンチ黒色粘土層のものについて述べると、土器は全て破片でかつ細片が多いものの中には磨滅が極めて少ないものも含まれていることから、比較的近傍より流失したものとみられる。土器の形態をみると、甕形土器の中に山陰系の特徴を具備した複合口縁をもつもの（第81図1・2）があり注目される。搬入品か或は在地産かについては今後胎土等の細部観察を待って結論づけたいが、山陰の編年では広義の鍵尾式に相当し、藤田憲司氏編年²⁾のⅢ～Ⅳ期に属すると考える。鍵尾式はさらに新古の様相からⅠ式（的場式）とⅡ式に区分されている³⁾が、本例はⅠ式の特徴である口縁外面に施される浅い繊細な櫛描き平行凹線は認められない点などから、後出的な様相が伺われⅡ式の範疇内において併行すると思われる。また、甕では体部外面に叩き目を施しているものがある（第81図9）。周防における叩き目技法の出現は、弥生土器か土師器かで議論の多い吹越遺跡4号住居出土土器群⁴⁾いわゆる吹越式—山本一朗氏による周防の土器編年⁵⁾のⅨ式の段階では認められず、山本氏編年X式、例えば湯田楠木町遺跡でみられるように畿内から伝播した庄内型土器の影響をもってなされたと推定されている。高坏類は山本氏編年では概ねⅨ～X式に属するもので、県内では秋根遺跡、土井ヶ浜遺跡、吹越遺跡、北九州では高島遺跡⁶⁾や出土のものに類似性が看取されるものがある。なお、周防の土器編年研究は、編年を行なう上での良好な出土土器資料はわずかで、とくに在地系と外来系との合併関係を示す具体的資料は稀少で、両者による相互の併行関係は未だ解明途中にあると考える。そのため当資料に関しても詳細な時期を決定しかねるが、一応上記のことを総合して勘案すると、黒色粘土層内の土器類は細分型式上では一時期に限定しうるものではなく、新古の様相が混在しており、一括資料として扱うには躊躇する。いずれにしても布留式の時期まで下るものではなく、敢えて畿内編年に対象するならば新しい様相のものは庄内式併行期と察せられることから、これらは弥生時代終末から古墳時代初頭の時期に位置づけられると考える。

木製品はこの地点の湧水点が高く、埋土が湿潤していたことが概ね良好に遺存する要因になったもので、県下では数少ない木製品出土地として注目されよう。木製品の中で特筆すべきものに鳥形木製品がある。この類は朝鮮半島や大陸などに現存する民族例から、霊鳥信仰を示す鳥杵と考えられている。今日まで日本における弥生時代から古墳時代にかけての鳥形木製品は西日本を中心に15遺跡31例に及ぶものの、既出例の場合すべて鳥形本体のみの出土で、杆とセットになって検出されたものは皆無であったことから、本例は霊鳥信仰が古く大陸から日本へ入って来た証拠を示すより具体的事例として、また従来より想

小 結

定されている装着方法とも異なる点なども加え、貴重な発見といえよう。

竪穴式住居跡 Gトレンチで確認した竪穴式住居跡は、工期等の都合でその一部を検出したに留まったが、平面形態は方形プランを呈すると察せられ、規模は周壁二辺と竈の確認により、すなわち一般的に竈は一辺の中央に付設される例が大半を占めることから推定し、この住居の一辺は4 m前後を測るものと思われる。この大きさは当時においては普遍的な規模である。

出土土器は器形、調整手法等により布留式の様相を呈しており、Aトレンチ黒色粘土出土のものより後出的な要素を示す。ただし、詳細な時期決定は県下における土師器編年が未だ検討段階にあるため断定しかねるものの、周辺地域出土のものとの対比検討するに、一応5世紀前半、およびその前後と推定され、古墳時代前半期まで遡る可能性をもつ。

今日まで白石周辺での古墳時代の遺跡は、鴻ノ峰古墳群⁷⁾、白石古墳群⁸⁾、茶白山古墳群⁹⁾など山麓およびそれより派生した小丘陵上に立地する埋葬関係のものがよく知られており、またそれらの中には発掘調査によってその実態が明らかにされているものも多くあるため、当時の奥津城の立地条件や墳墓形態などについては漸次資料が蓄積され研究も進んでいる。しかし、そこに埋葬された人々の居住地については、わずかに白石遺跡の西方500 mに位置する県立山口高等学校敷地内に須恵器を伴出する包含層が確認されている¹⁰⁾ことから、集落は山麓・丘陵縁辺部直下の緩傾斜面上に存在しているのではないかと推測されていたものの、それを具体的に立証する生活関連遺構の検出が全く無く、未解決の問題であった。そのため、今回の調査で検出した竪穴式住居跡は鴻ノ峰南麓下の地域では初見のごとくであり、今後この地の歴史を究明する上で貴重な発見で意義が高い。また住居跡自体に関しても住居内の壁面に作りつけの竈を付設しているものとしては山口県下では最古時期に属し、かつ全国的にみても一般に普及するのが6世紀以降であることから、当資料は古い段階に属するものとして日本各地に波及するまでの伝播ルート解明に一石を投ずる資料になりうると考える。さらに、従来山口盆地では埋葬形態の様相により古墳時代前半期段階にあっては弥生文化の伝統を強く維持し、外来文化の伝播に対しては閉鎖的指向が強いとされていたが、今回の竈例のように生活面においては逆に先進的文化要素を積極的に摂取していたものもあったことが窺われる。

以上のような、今回の調査は限られた時間と調査範囲の中であったが学術的には予想以上の成果を上げることができた。調査の契機となった工事では本試掘調査の結果より直接埋蔵文化財に対する影響は少ないと判断されたため、検出遺構は最小限の調査後再び地中

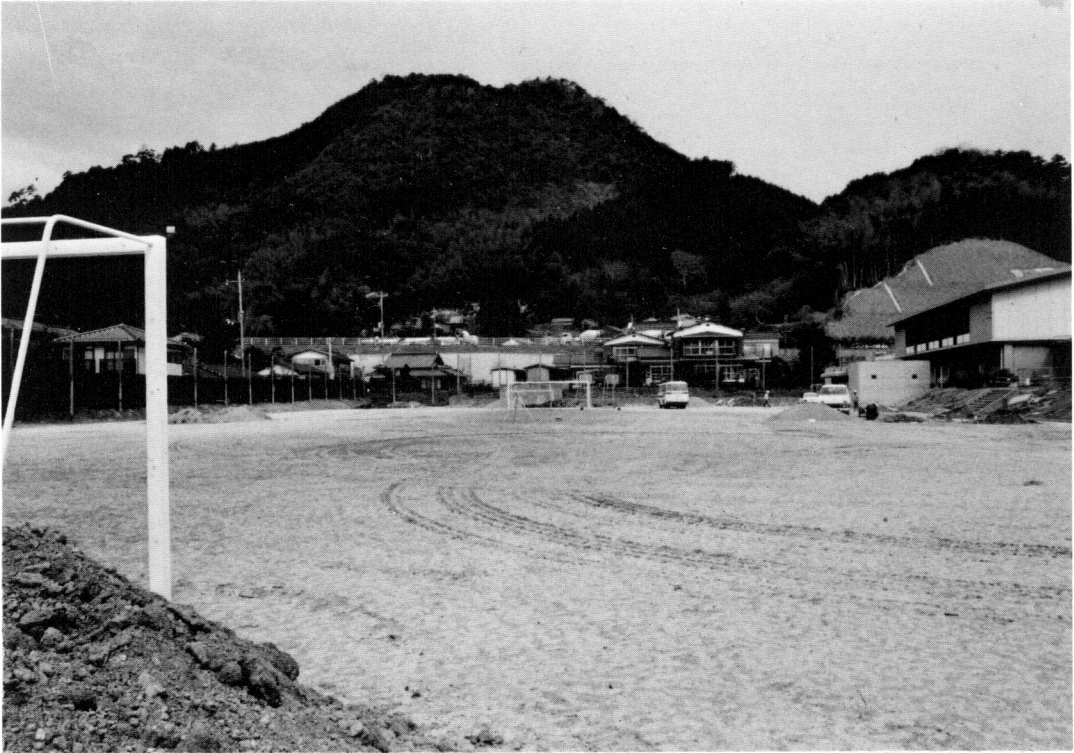
に埋め戻されており、将来十分な調査をなされることが望まれる。なお、調査後本遺跡は「白石遺跡」と称し、周知の遺跡に登録した。

なお、調査にあたっては人文学部考古学研究室の近藤喬一・中村友博両先生をはじめ学生諸君の御協力を得た。木製品の取り上げに際しては山口県埋蔵文化財センター（渡辺一雄氏）に御願いし、また、鳥形木製品に関して國分直一先生（梅光女学院大学教授）に御教示を賜った。ここに各位に対し記して深甚の謝意を表します。

（森 田）

〔注〕

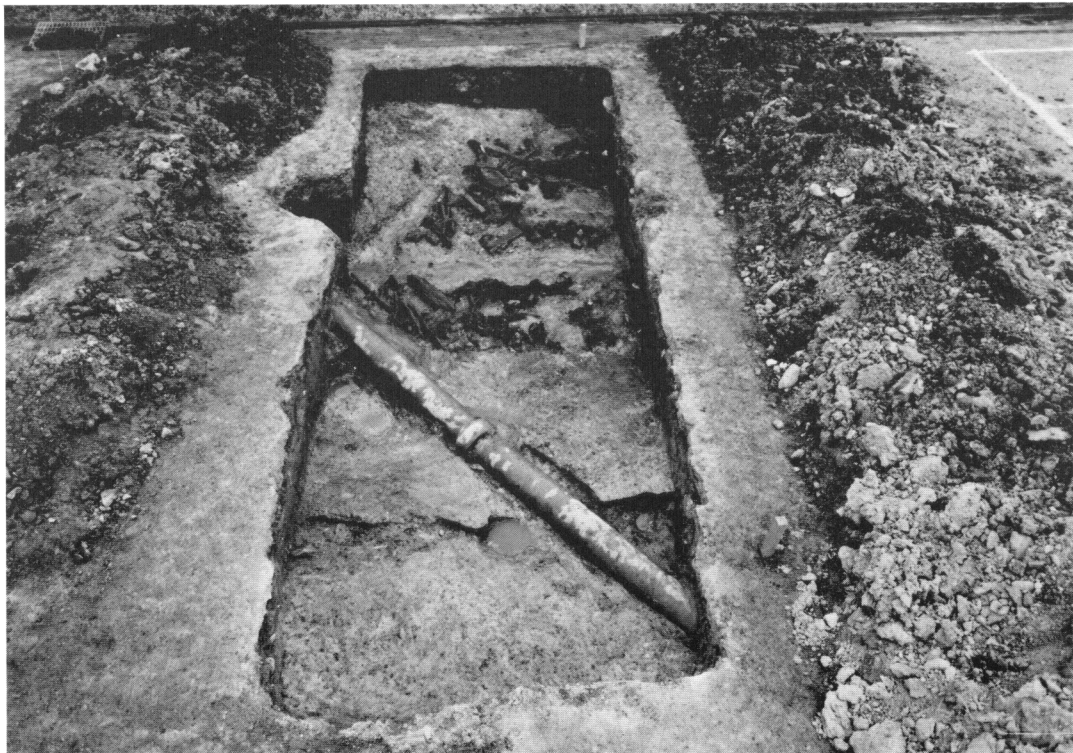
- 1) 木製品の樹種鑑定は将来に譲る。また、実測図の断面図には年輪を模式的に図示した。ただし、加工木-1については保存処理中のため観察できなかった。
- 2) 藤田憲司 「山陰「鍵尾式」の再検討とその併行関係」 (『考古学雑誌』64巻4号、1979年)。
- 3) 前島己基・松本岩雄 「島根県神原神社古墳出土の土器」 (『考古学雑誌』62巻3号、1976年)。
- 4) 平生町教育委員会 「吹越遺跡第2次調査概要」 (1972年)。
- 5) 山本一郎 「防長の弥生式土器」 『山口県の弥生式土器-集成と編年-』 (『周陽考古学研究所報』2、1979年)。
- 6) 北九州市埋蔵文化財調査会 「高島遺跡」 (『古文化談叢』第3集、九州古文化研究会、1976年)。
- 7) 山口県教育委員会 「朝田墳墓群Ⅱ・鴻ノ峰Ⅰ号墳」 (1977年)。
- 8) 山口県教育委員会 「しらいし古墳群」 (1980年)。
- 9) 弘津史文 「周防國赤妻古墳並茶臼山古墳(其二)」 (『考古学雑誌』18-5、1928年)。
山口市教育委員会 「茶臼山古墳・大判石棺調査報告書」 (1979年)。
- 10) 三宅宗悦 「周防國吉敷郡山口町糸米山口高等學校校内土器包含地發掘調査報告」 (『山高郷土史研究會考古學研究報告書』、1927年)。



(1) 小学校運動場全景（南から）



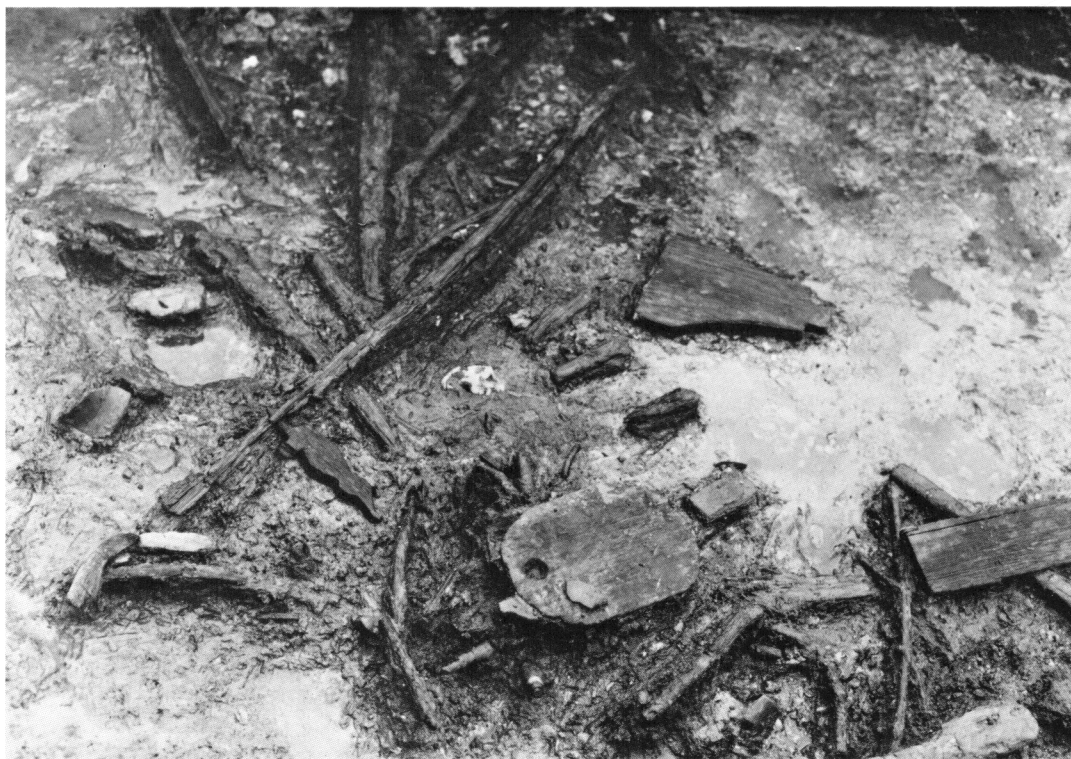
(2) A・Bトレンチ全景（東から）



(1) Aトレンチ全景（東から）



(2) Aトレンチ遺物出土状況（南西から）

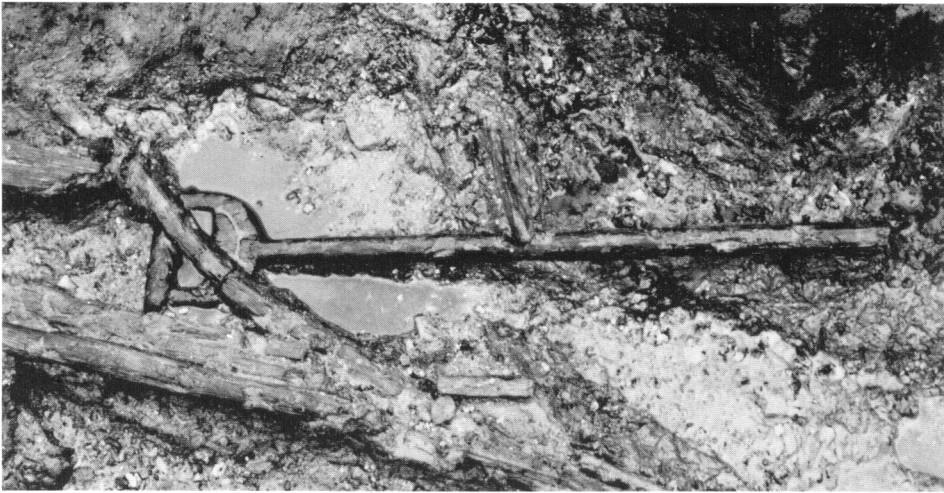


(1) Aトレンチ遺物出土状況（南から）



(2) Aトレンチ遺物出土状況（西から）

(1)
鋤出土
状況



(2)
鋤出土
状況



(3)
木製品
出土
状況





(1)
出土状
板状



(2)
出土状
鳥形木
製品



(3)
出土状
鳥形木
製品

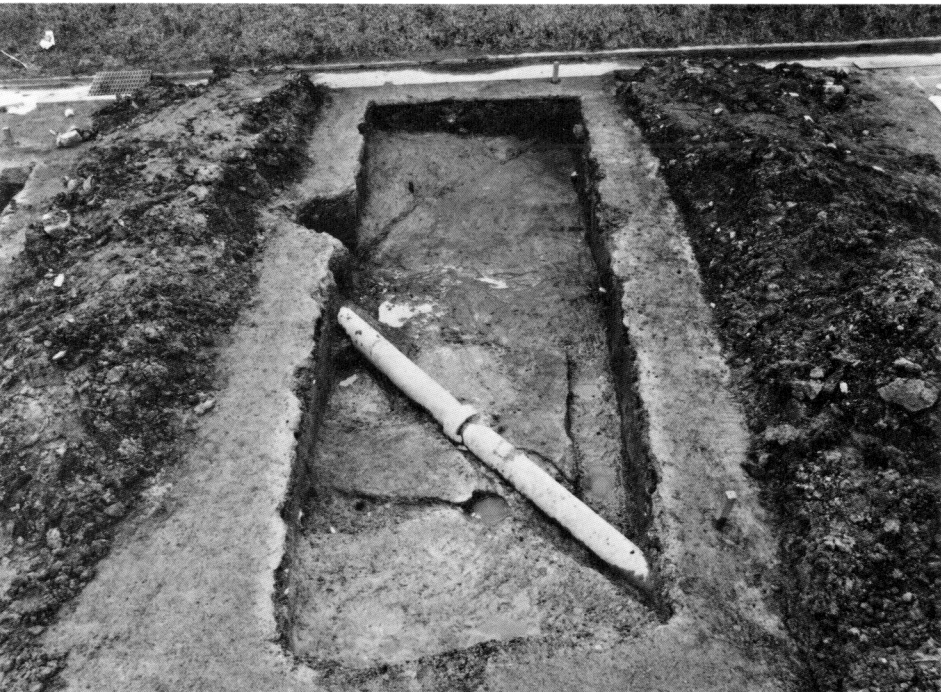
(1)
鳥形木
製品出土
状況



(2)
加工木
-1出土
状況
(鳥形を
外した
状況)

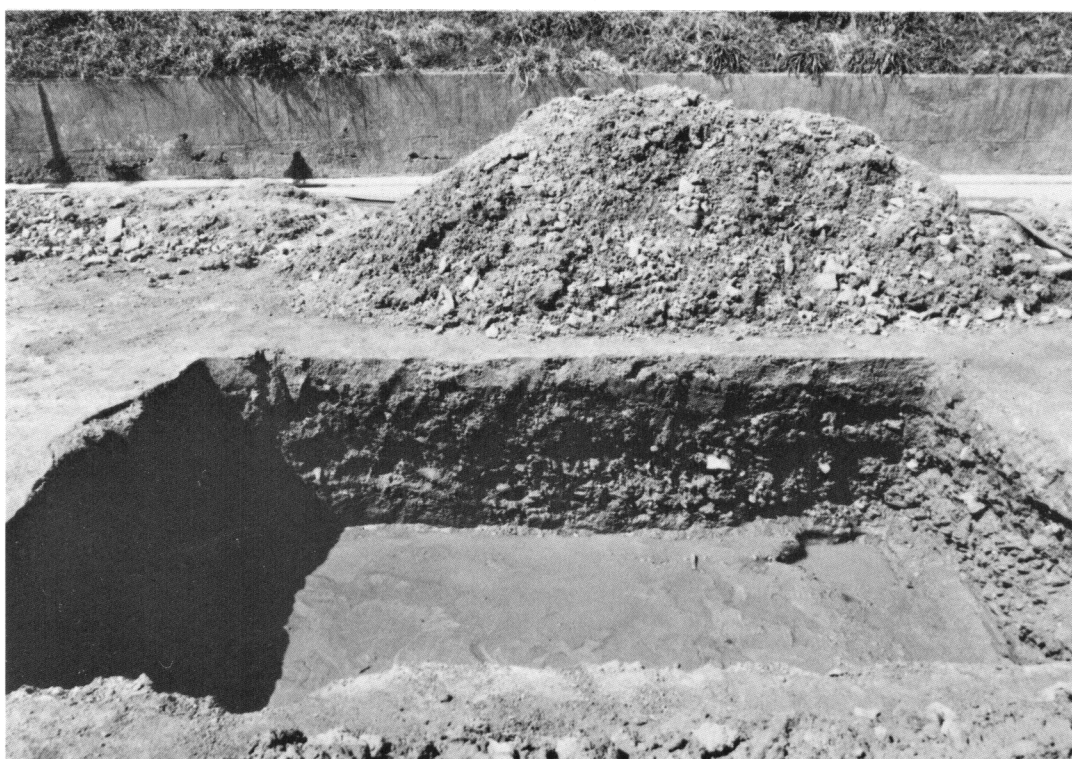


(3)
Aトレ
ンチ完
掘状況

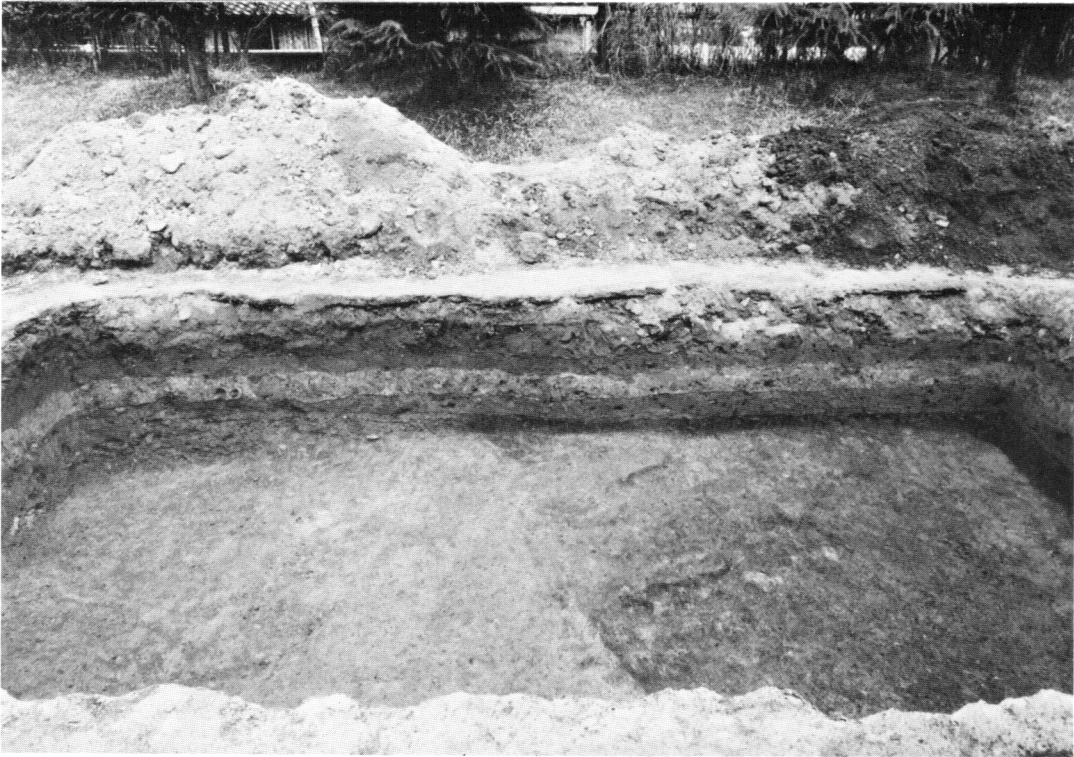




(1) Cトレンチ全景(南から)



(2) Dトレンチ全景(南から)



(1) Gトレンチ全景 (北から)



(2) Gトレンチ全景 (東から)



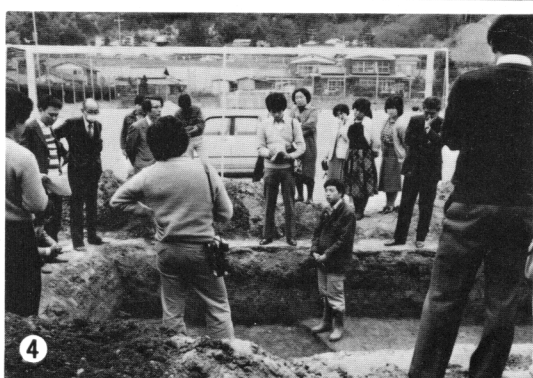
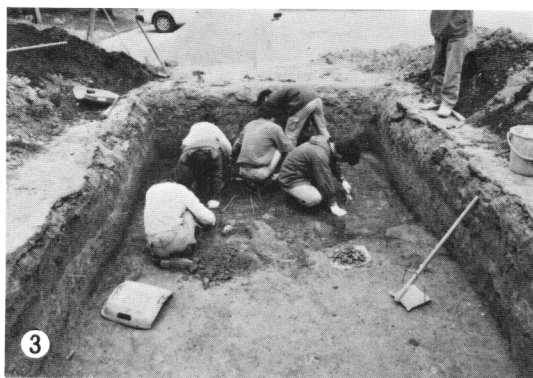
(1) Gトレンチ竪穴式住居跡土器出土状況



(2) Gトレンチ竪穴式住居跡竈付近土器出土状況



(1) Hトレンチ (幼稚園運動場)

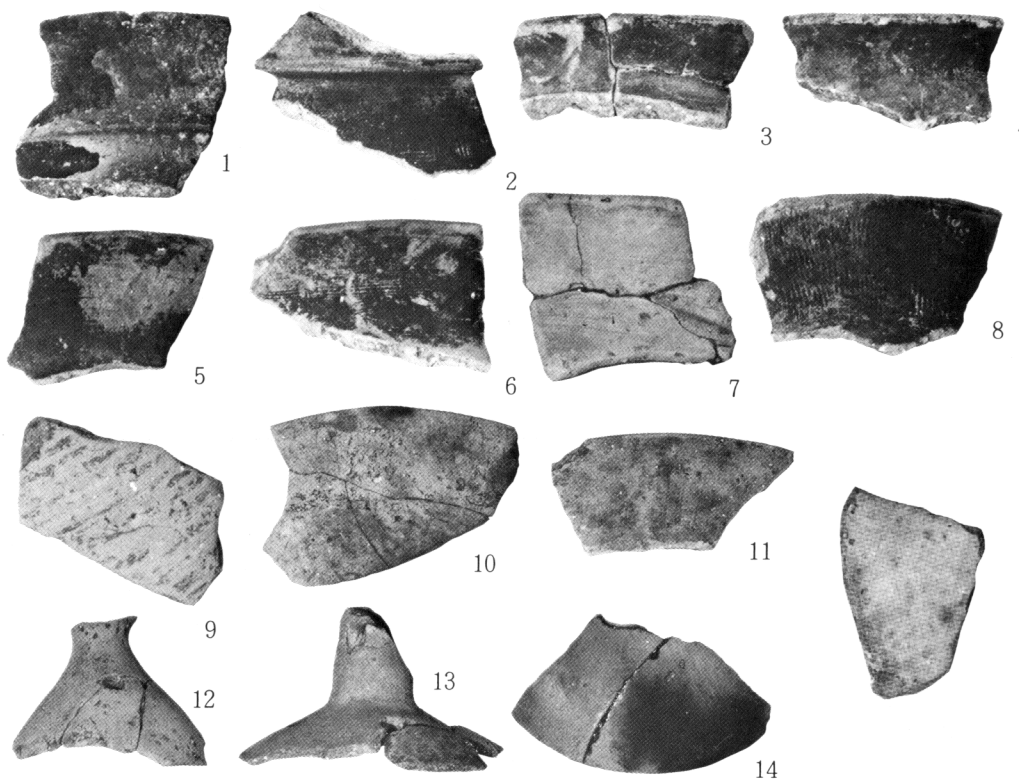


① Eトレンチ北壁土層断面

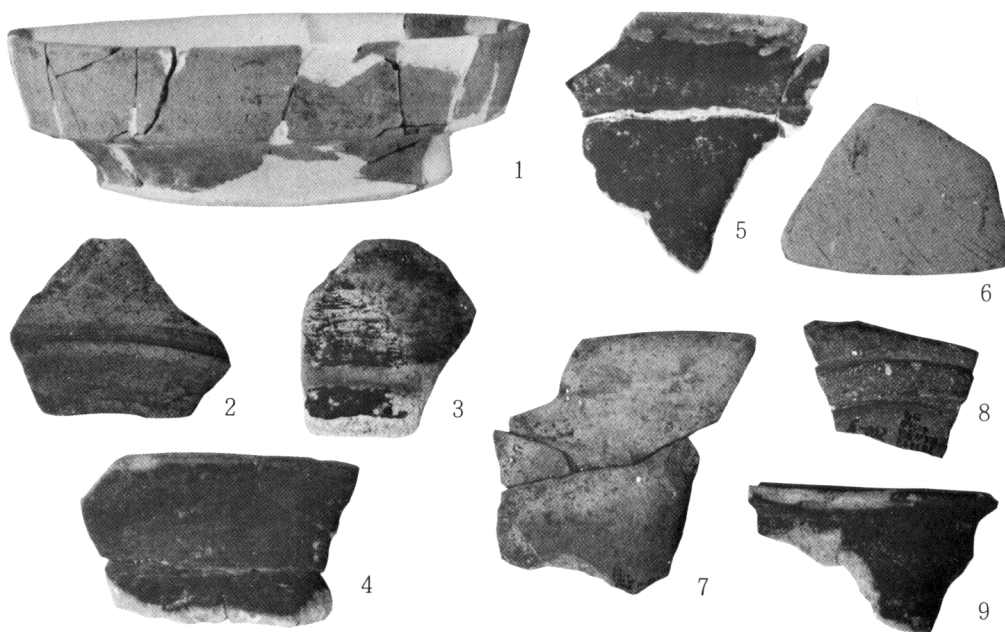
③ 発掘風景 (Gトレンチ)

② Fトレンチ北壁土層断面

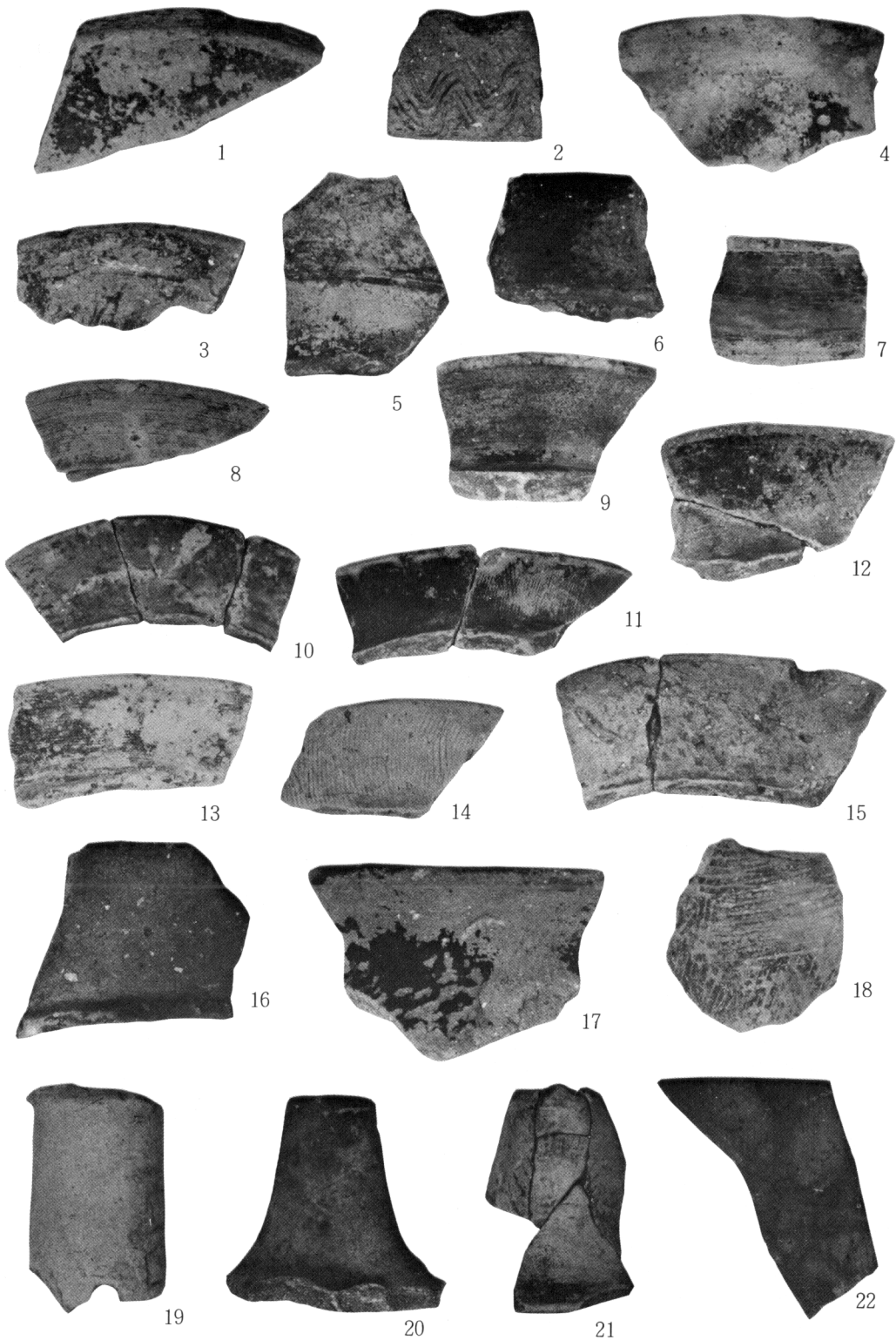
④ 現地説明会風景



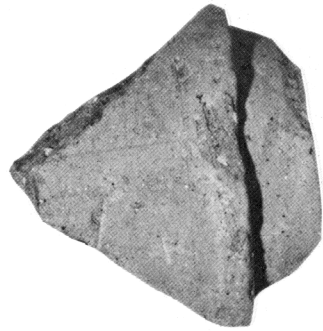
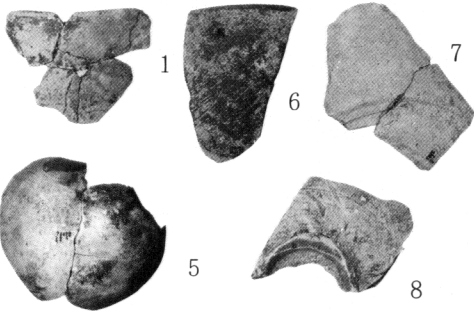
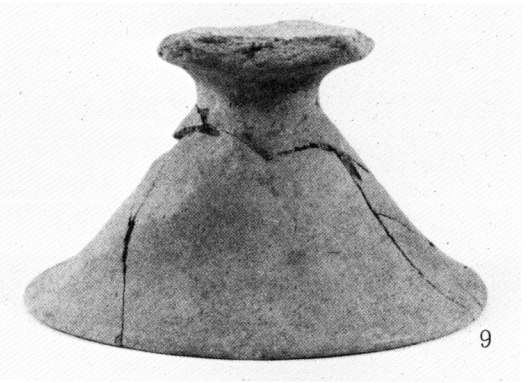
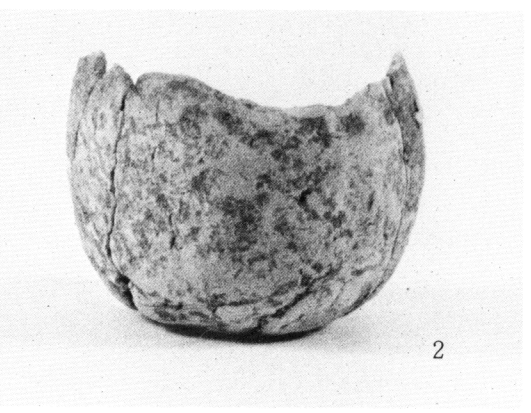
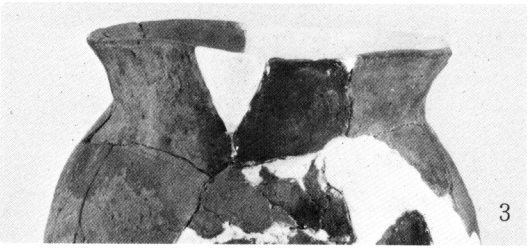
(1) Aトレンチ第8層（黒色粘土層）出土土器・石器



(2) Bトレンチ出土土器

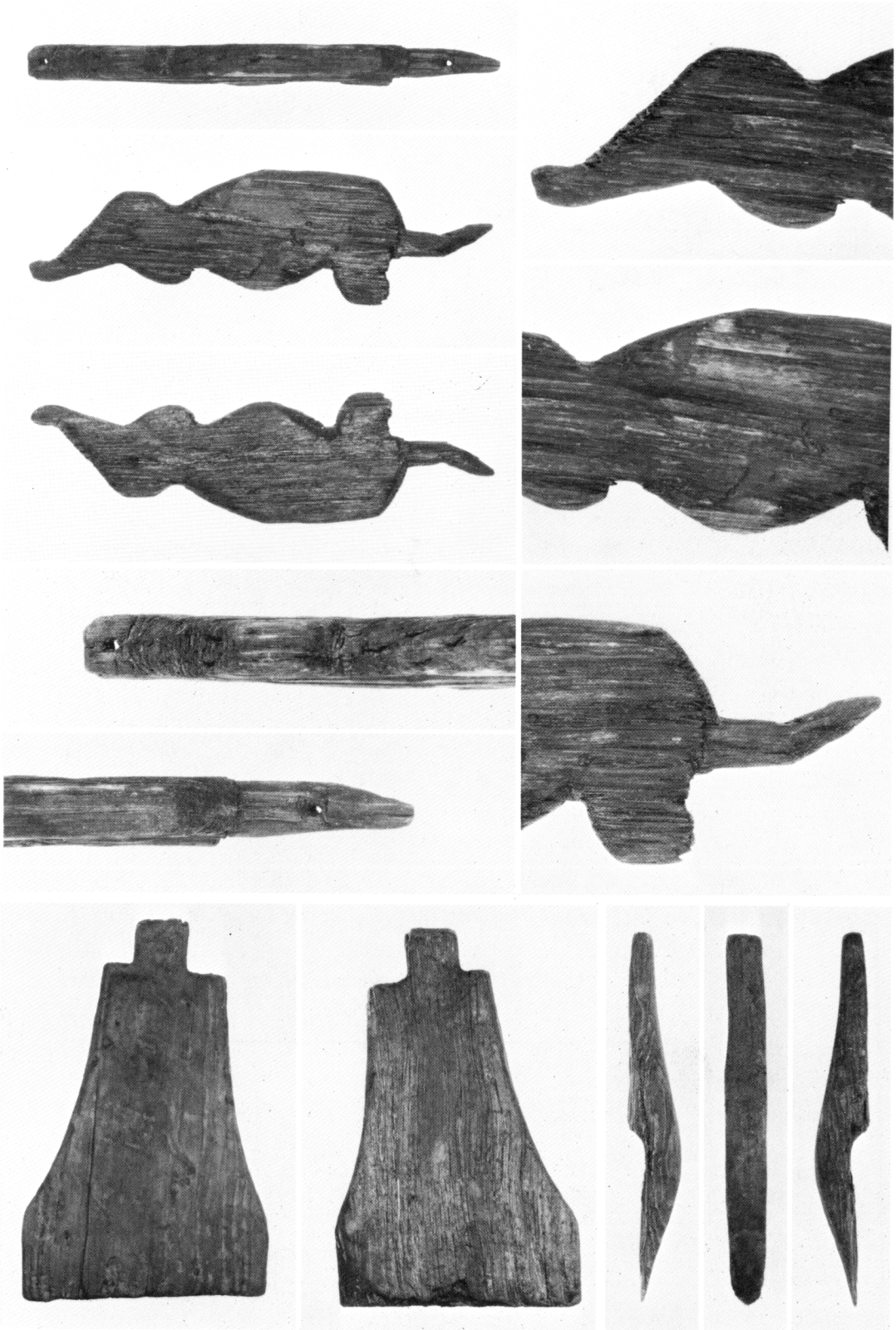


Aトレンチ第7層（黒灰色粘土層）出土土器



(1) Gトレンチ縦穴式住居跡出土土器 (1~9)

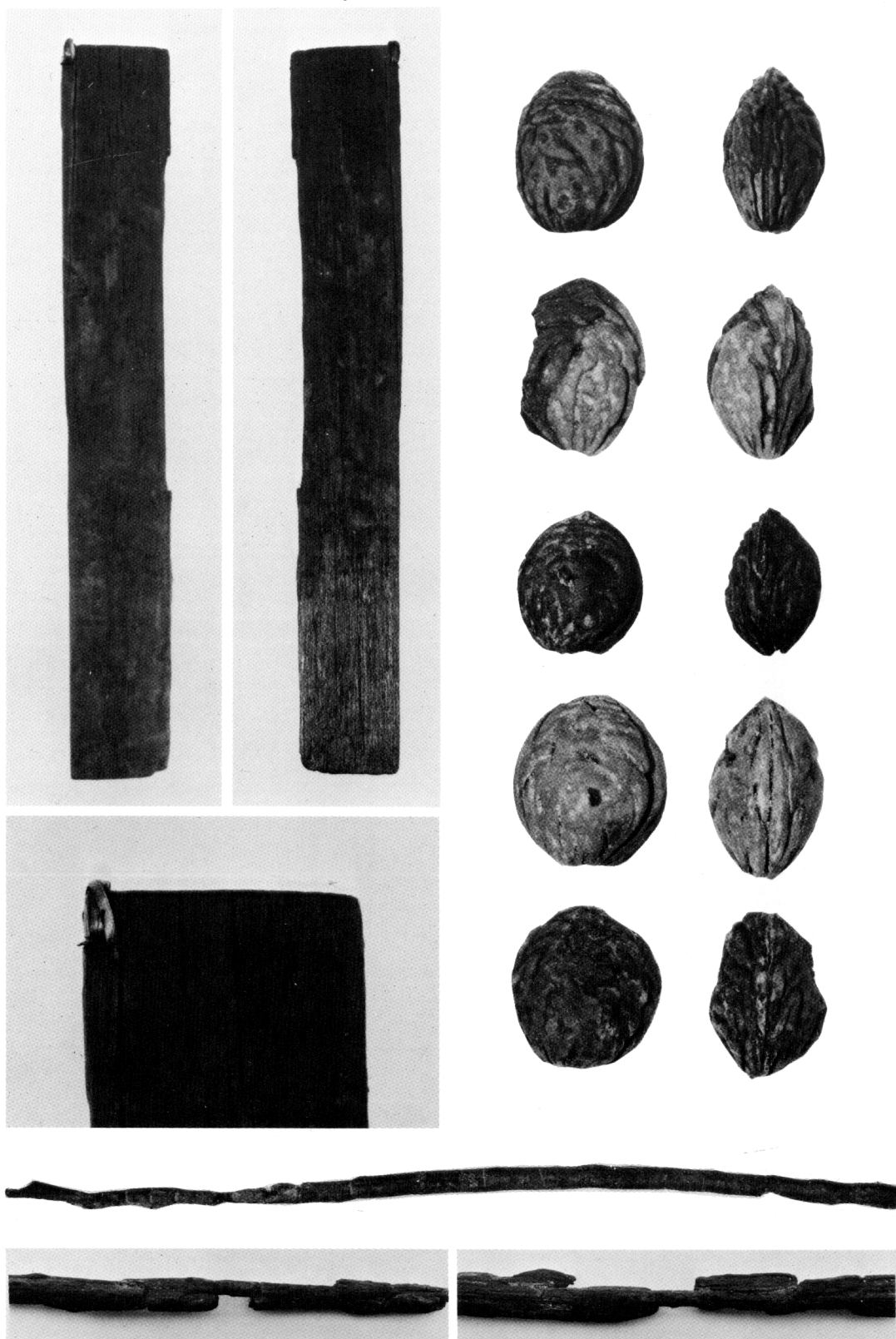
(2) Eトレンチ出土瓦



A トレンチ第8層（黒色粘土層）出土木器



A トレンチ第8層（黒色粘土層）出土木器



Aトレンチ第8層（黒色粘土層）出土木器・植物遺体